

ハラクティ及びボリウニアの  
戦後集団移住地における子弟教育

1990年10月

国際協力事業団



LIBRARY

21701

JICA LIBRARY



1086237[3]

パラグアイ及びボリビアの  
戦後集団移住地における子弟教育

1990年10月

国際協力事業団

国際協力事業団

21701

## 序 文

本報告書は、パラグアイ及びボリビアの集団移住地における教育の現状について、中南米教育事情に詳しい学識者を現地に派遣し、アンケート調査結果や教育関係者、学生らとの懇談を通じて得られた情報に考察を加え、まとめたものである。

日本語教育については、「中南米及びカナダ移住者子弟の日本語教育調査報告書」（1980年）の他、代々の日本語指導教師らによって報告されているが、本報告書は、日本語教育に限らずスペイン語も含めた移住地の教育環境について、また移住地からの進学先となる都市部での中・高等学校についての調査をふまえて、今後の移住者子弟教育の方向を示したものとなっている。

時に厳しい指摘もみられるが、教育問題を考える上での貴重な提言がなされており、我々移住者援護事業に携わるものばかりでなく、現場の教師等、日系団体の関係者にも広く参考として頂きたい。

1990年10月

国際協力事業団  
移住事業部長

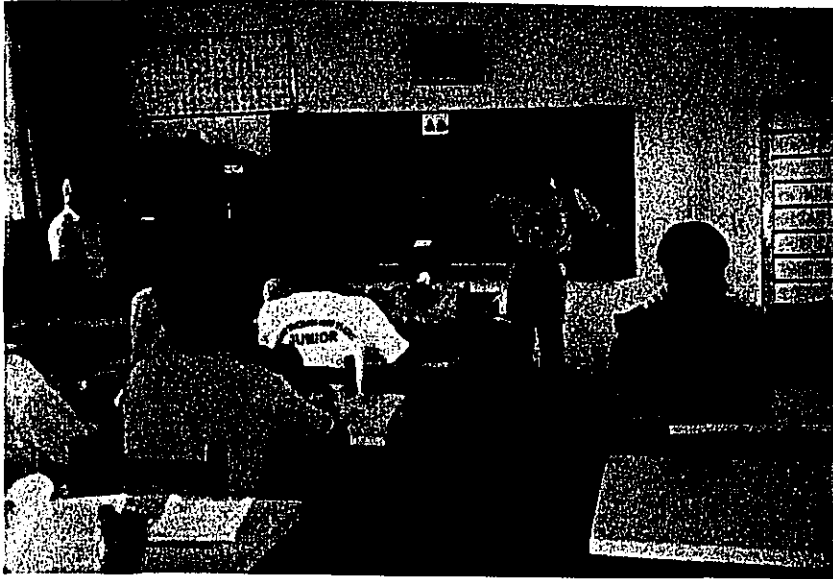


写真-1  
グアタパラ日本語学校高学  
年生の教室  
(中央は中川文雄団長)

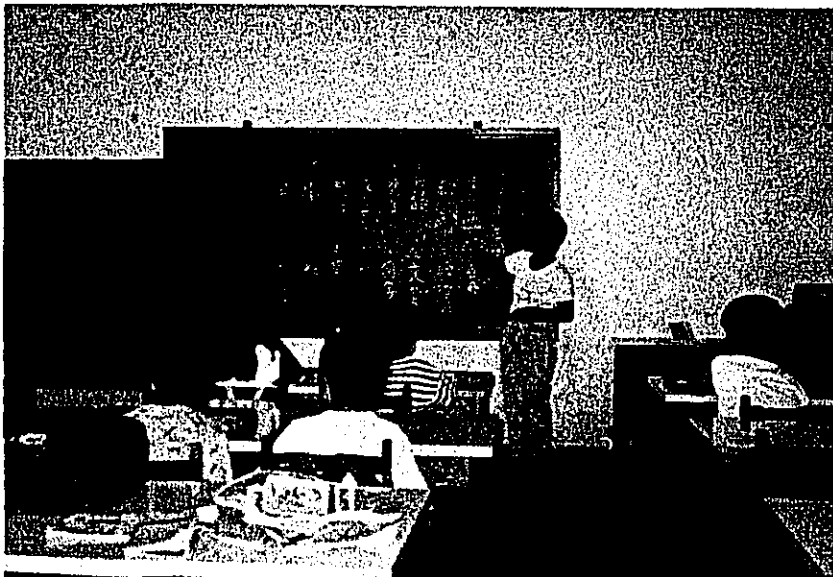


写真-2  
グアタパラ日本語学校  
漢字を学ぶ生徒たち



写真-3  
グアタパラ日本語学校  
校舎



写真-4  
エステ市（旧ストロエスネ  
ル）  
日本語学校の先生たちと調  
査団

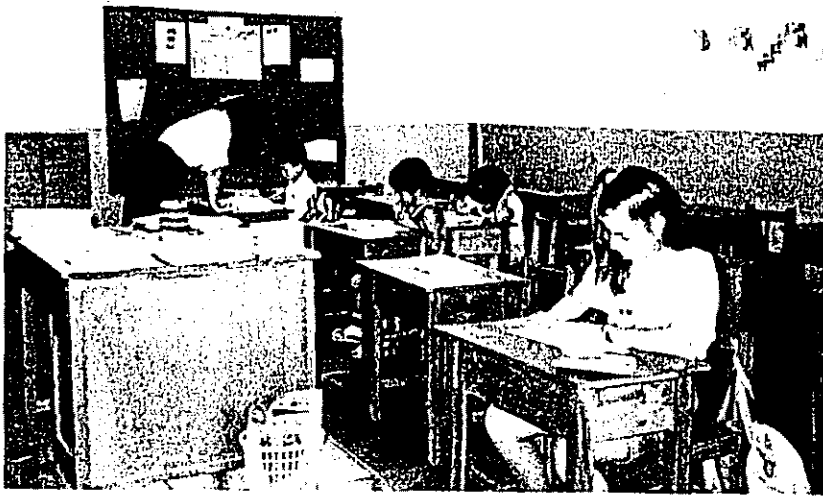


写真-5  
エステ市日本語学校  
授業風景

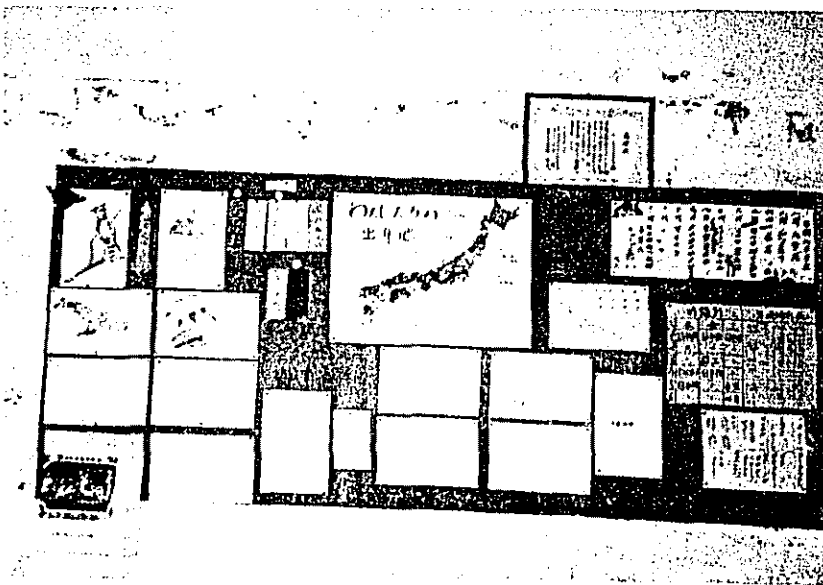


写真-6  
エステ市日本語学校の教室  
内の掲示版

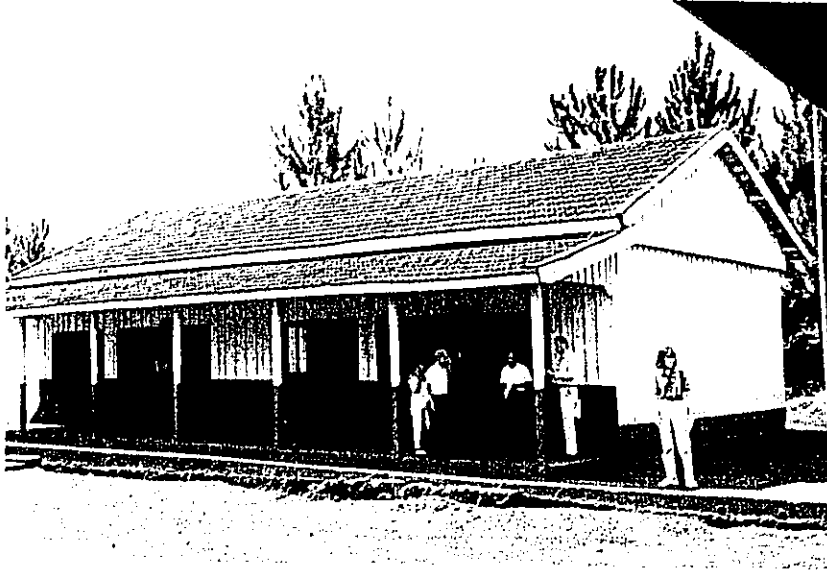


写真-7  
ピラポ移住地  
日本語学校校舎



写真-8  
チャベス移住地  
日本語学校授業風景



写真-9  
エンカルナシオン日本語学  
校  
先生、生徒たちと調査団





写真-10  
アスンシオン日本語学校授  
業風景 —生徒の年齢差に  
注目



写真-11  
サンタクルス市  
日系学生寮での寮生たちと  
の懇談風景

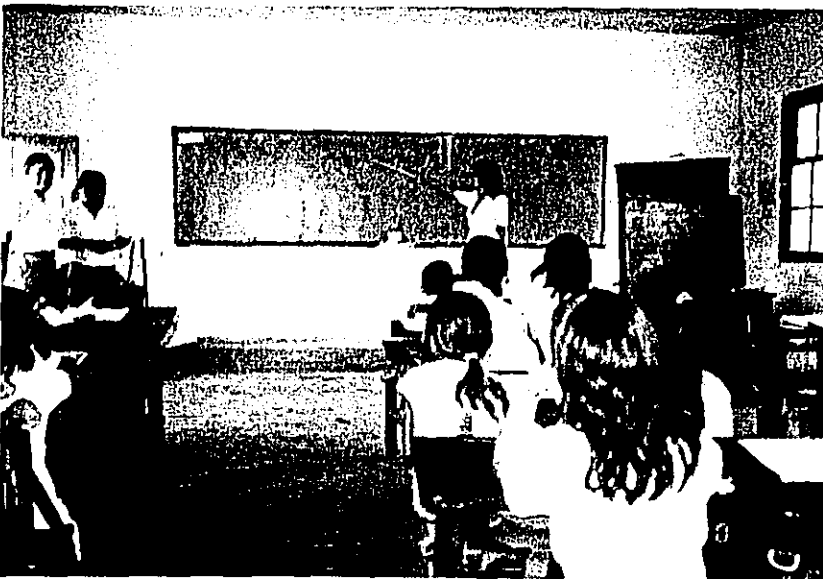


写真-12  
オキナワ第1移住地  
公立校の授業風景

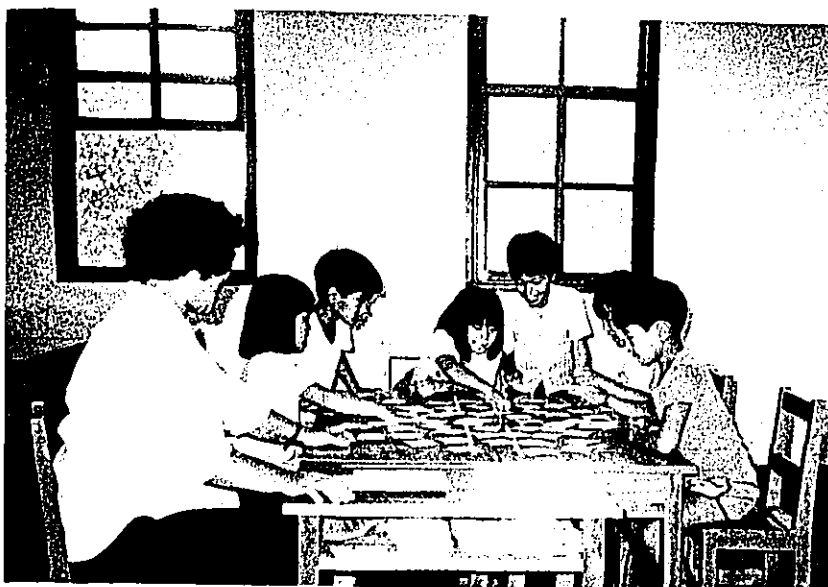


写真-13  
オキナワ第2移住地日本語  
学校  
カルタ取りで「ひらがな」  
を覚える1年生

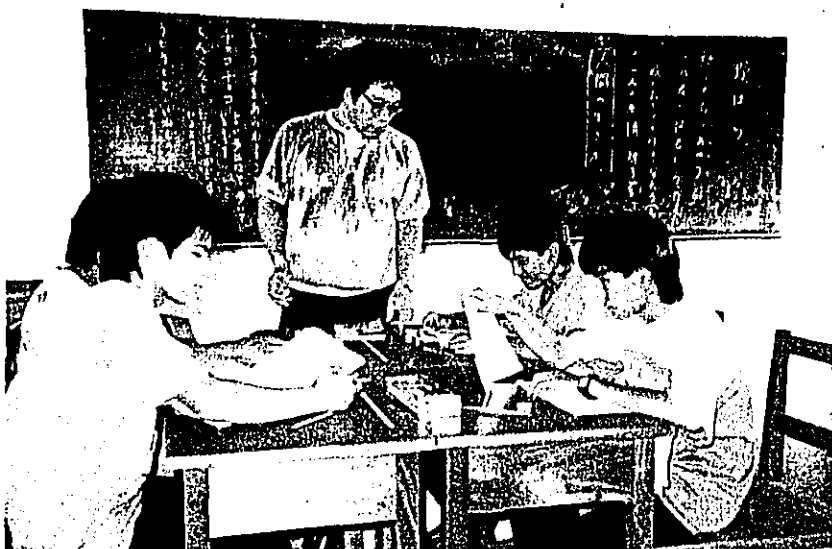


写真-14  
オキナワ第2移住地日本語  
学校  
高学年生の授業風景

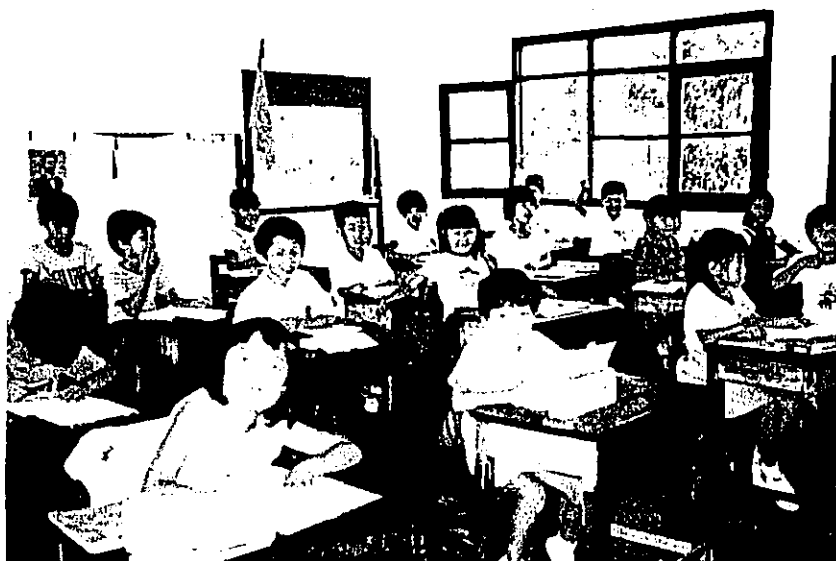


写真-15  
サンファン移住地  
サンファン学園授業風景



写真-16  
サンファン移住地  
サンファン学園スクールバ  
スで登校した生徒たち

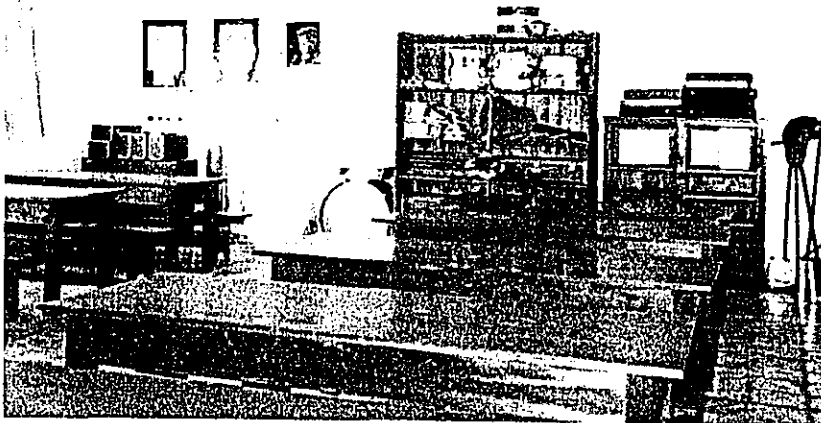


写真-17  
サンファン移住地  
サンファン学園音楽教室

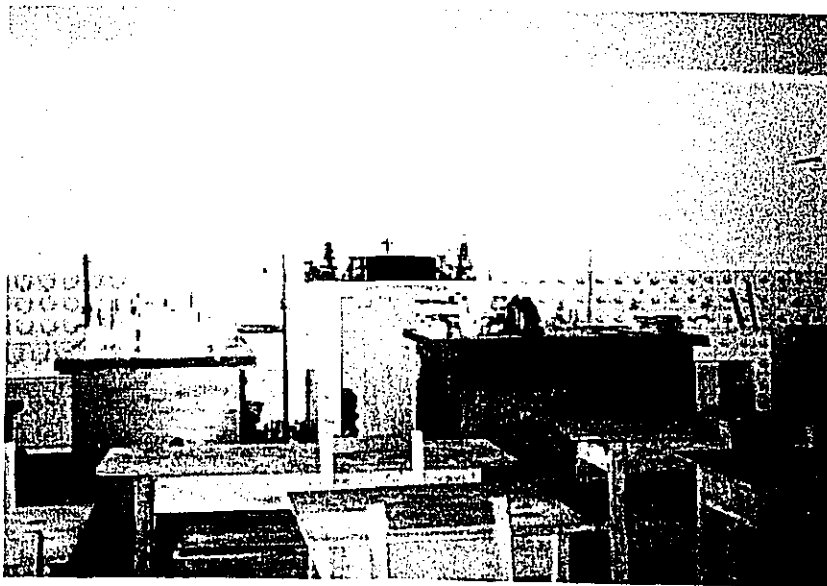


写真-18  
サンファン移住地  
サンファン学園理科教室



写真-19  
サンファン移住地  
サンファン学園テレビ教室



写真-20  
アスンシオン市内  
コレヒオ・ダンテ・アリギ  
エリィ (イタリア系学校)  
図書室で、自習する生徒た  
ち



写真-21  
アスンシオン市内  
コレヒオ・ダンテ・アリギ  
エリィ (イタリア系学校)  
休み時間の教室



写真・22

アスンシオン市内  
コレヒオ・ダンテ・アリギ  
エリィ（イタリア系学校）  
幼稚園部の教室

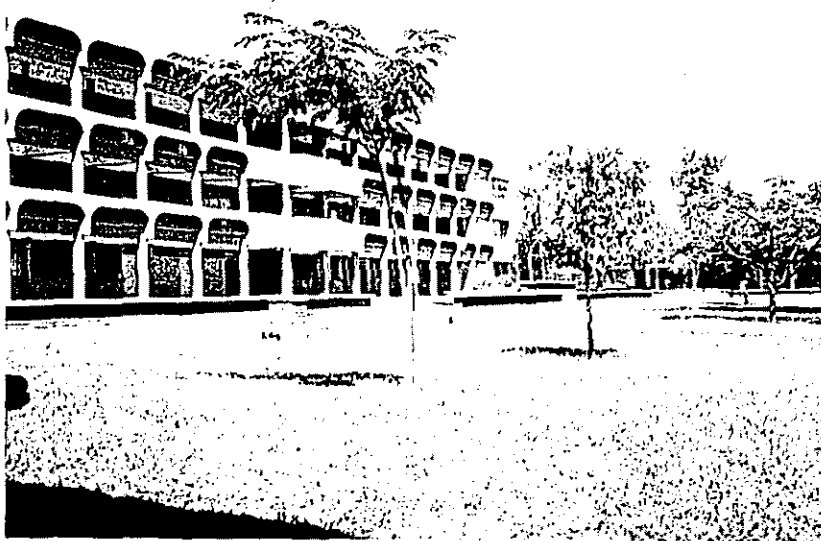
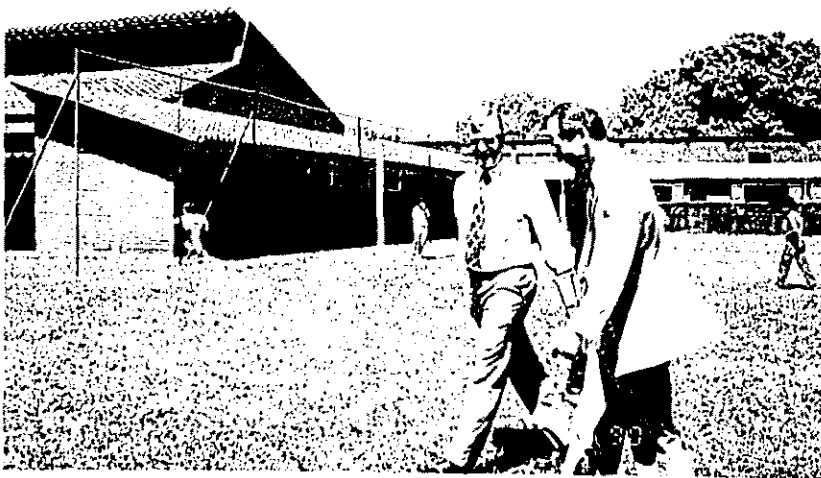


写真 23

アスンシオン市内  
コレヒオ・アレマン（ドイ  
ツ系学校）  
校舎



写真・24

アスンシオン市内  
アメリカン・スクール  
校内を案内する校長先生と  
中川団長

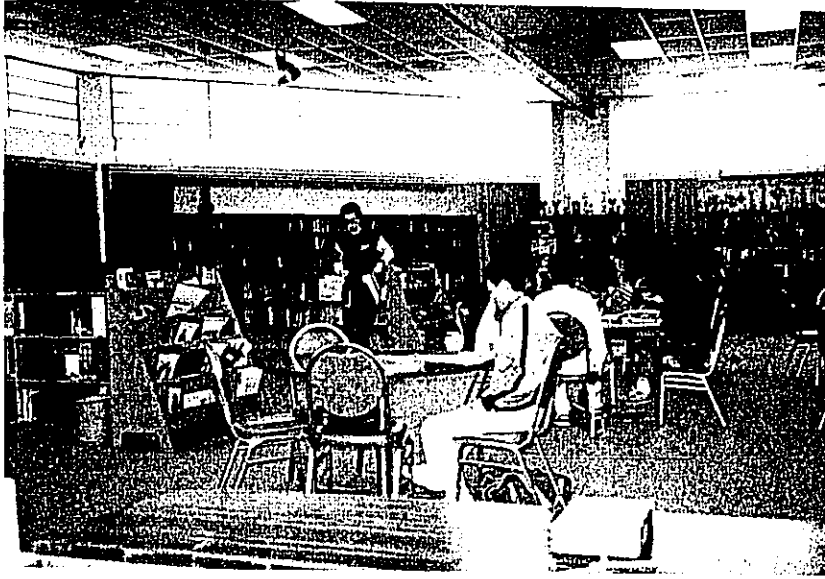


写真 25  
アスンシオン市内  
アメリカン・スクール  
図書室で自習する生徒たち



写真 26  
アスンシオン市内  
コレヒオ・シャン・カイ・  
シェク（台湾系学校）  
校舎



写真 27  
サンタクルス市内  
コレヒオ・アレマン（ドイ  
ツ系学校）  
図書室



写真-28  
サンタクルス市内  
コレヒオ・アレマン（ドイツ系学校）  
先生のお話を聴く生徒たち

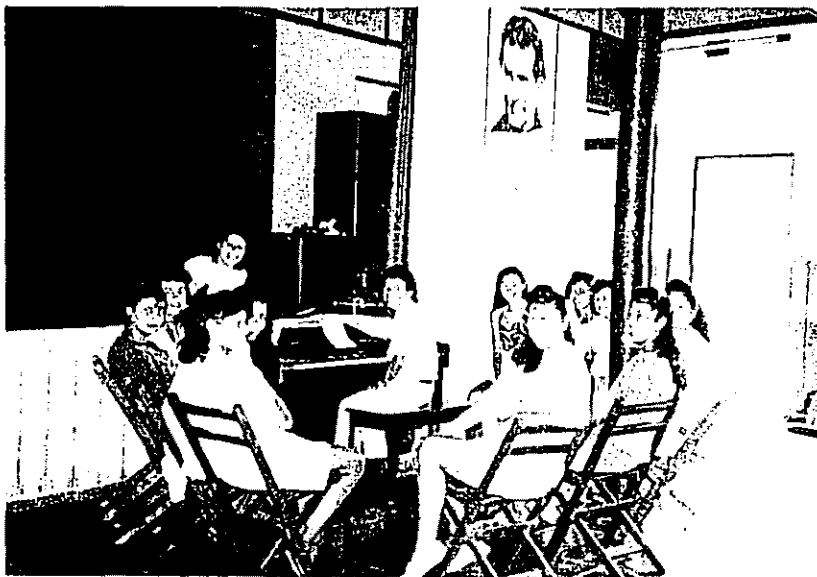


写真-29  
モンテローロ市  
マリア・アウシリアドーラ  
女子校  
講堂でコーラスを練習する  
女子生徒たち



写真-30  
モンテローロ市  
マリア・アウシリアドーラ  
女子校  
学生寮



写真-31  
モンテローロ市  
マリア・アウシリアドーラ  
女子校  
調査団を校内案内してくれ  
た教職員の修道女たち



写真-32  
モンテローロ市  
ムユリーナ男子校  
校内風景

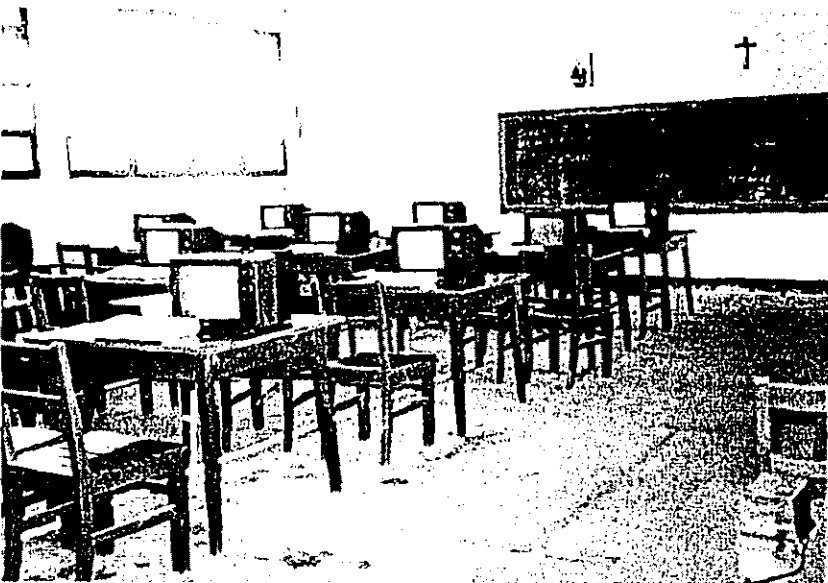


写真-33  
モンテローロ市  
ムユリーナ男子校  
コンピューター教室





写真-34  
ラパス市カラコト  
アメリカン・スクール正門

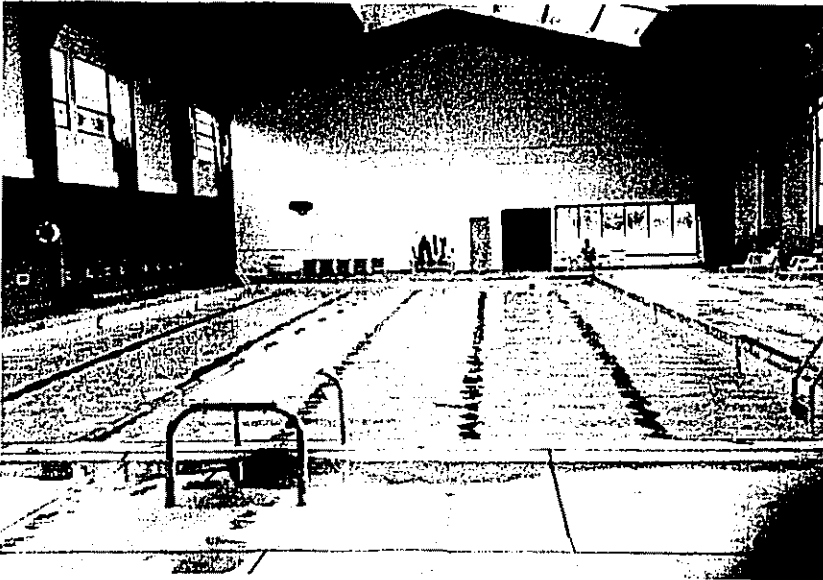


写真-35  
ラパス市カラコト  
アメリカン・スクール  
室内プール



写真-36  
ラパス市  
ドンボスコ校  
校内を案内する校長先生

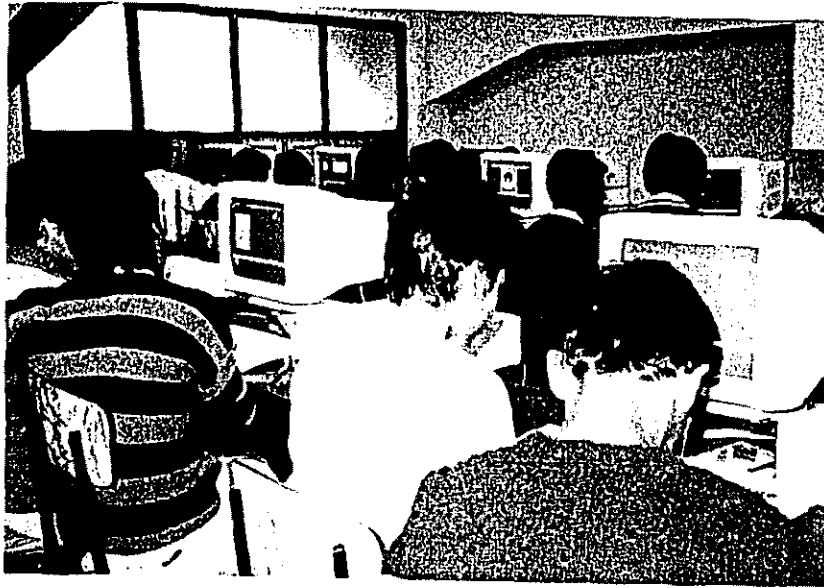


写真-37  
ラパス市  
ドンボスコ校  
コンピューター教室

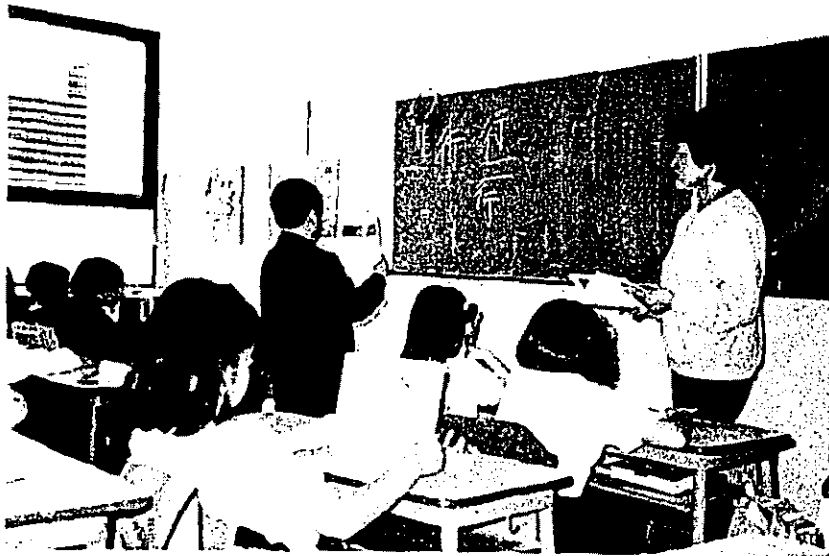


写真-38  
ブエノスアイレス市  
日亜学院午後の日本語による授業風景（同じクラスが午前中はアルゼンチンのカリキュラムによりスペイン語で学ぶ）



写真-39  
ブエノスアイレス市  
日亜学院幼稚園部  
午前中はアルゼンチン人の先生とスペイン語で遊ぶ。



写真-40  
ブエノスアイレス市  
日亜学院幼稚園部  
午後は日系人の先生と日本語で遊ぶ。

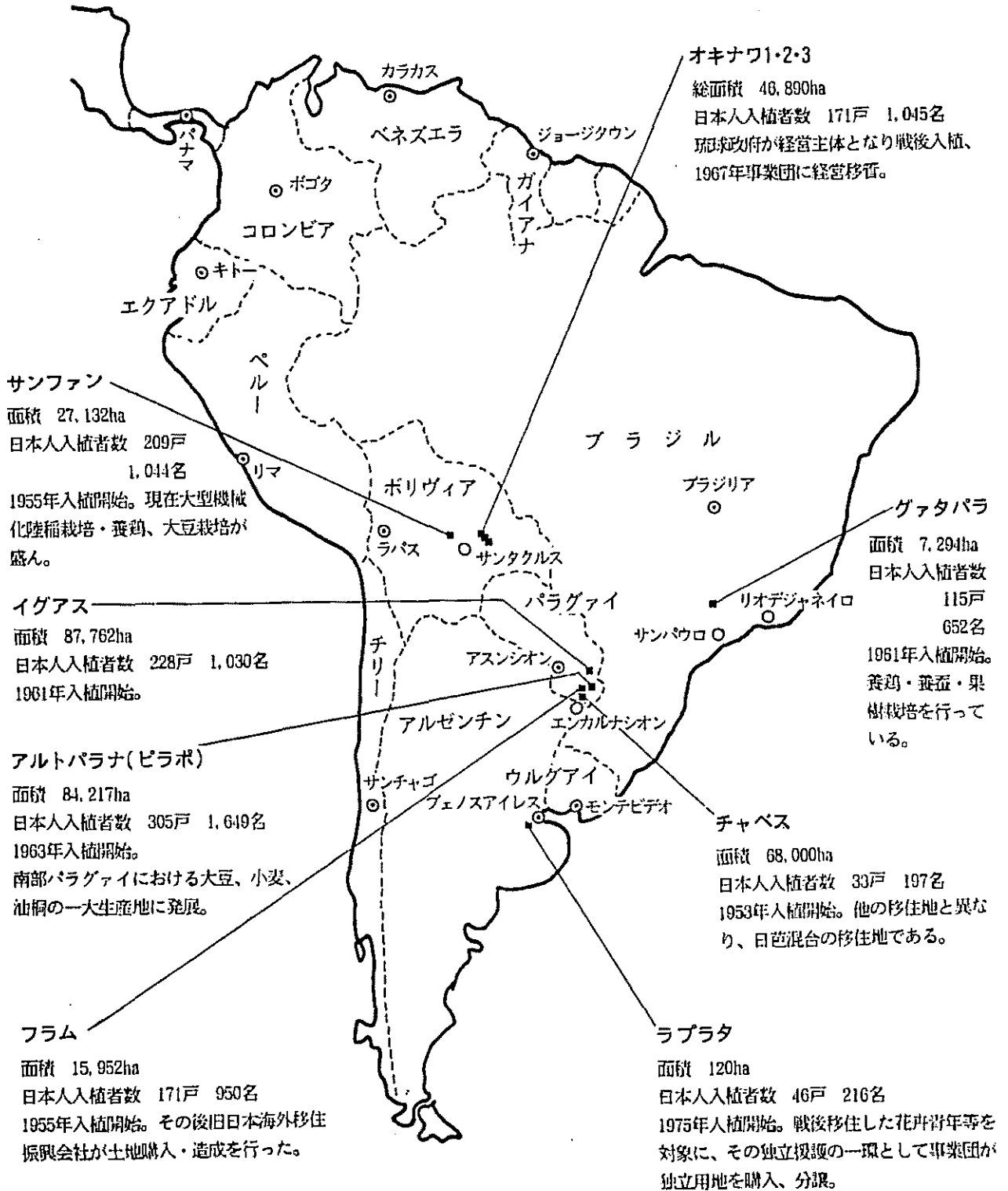


写真-41  
ラプラタ日系学生寮  
寮生と懇談する調査団



写真-42  
ラプラタ日系学生寮  
寮生の部屋

調査団訪問移住地地図



# 目 次

序 文  
写 真  
地 図  
目 次

I. 調査団の派遣	1
1. 派遣の経緯と目的	1
2. 調査団の構成	1
3. 調査日程	1
4. 主要面談者	4
II. 調査報告	9
はじめに	9
1. パラグアイ及びポリヴィア日系社会における日本語教育の現状	12
1-1 日系社会における日本語使用の現状	12
1-2 日本語学校の運営主体と経営の状況	16
1-3 日本語教育のプログラム	20
1-4 日本語教育現場が抱える諸問題	24
1-4-1 教師不足の問題について	24
1-4-2 適切な教材不足について	24
1-4-3 親の日本語教育に対する協力と努力不足について	25
1-4-4 日本語を学ぶ動機づけの不足について	25
2. パラグアイ及びポリヴィア移住地子弟のおかれた日・西2言語併用生活 —— 2言語併用教育の現状と展望 ——	26
2-1 日・西2言語による教育の問題点と利点	26
2-1-1 バイリンガリズムの問題点と利点	26
2-1-2 バイリンガリズムと知的発達	26
2-1-3 2言語併用者のドロップアウトの問題	27
2-1-4 第1言語を通じての言語的認識・分析思考力の発達とその後の 学力向上	28

2-1-5	家庭内での日本語の重要性と正しい日本語の問題	29
2-1-6	日・西両語学習の積極的意義と残された問題	30
2-2	2言語・2文化をめぐる移住地の環境と反応	31
2-2-1	日・西2言語の使用状況とそれへの子弟の対応	31
2-2-2	日本語学校生徒にとっての日本語 —— 混血、非日系生徒の増加と国語、 外国語、継承語 ——	32
2-2-3	移住者子弟による日本語学習利点の積極的肯定	33
2-2-4	スペイン語教育への親の熱意と子弟の西語能力不足への憂慮	35
2-2-5	西語教育への子供たちの反応 —— 日・西両語の肯定 ——	36
2-2-6	西語校の質の低さの問題	36
2-2-7	現地価値観との接触と2文化間でのアイデンティティ	37
2-2-8	教育熱と教育への親のかかわり方	39
2-3	移住地の内外における2言語教育の現状	40
2-3-1	移住地内での2言語教育	40
2-3-2	外国系有名校の2言語教育	43
2-3-3	日系国際校（コレヒオ・ハポネス）の構想と外国系有名校	45
3.	パラグアイ及びボリヴィア日系社会の子弟教育に関する意識と現実	47
3-1	子弟教育に関する移住地日系社会の意識と態度 —— アンケート調査結果を中 心にして ——	47
3-2	日系子弟の高校進学と問題点	49
3-3	日系子弟の高等教育機関進学と問題点	53
4.	移住地子弟教育政策への提言	56
4-1	移住地社会の変化と人材育成	56
4-2	移住地子弟に対する日本語教育の今後の展望と位置づけ	56
4-3	日本政府（JICA）が担うべき支援と施策	57
4-3-1	西語教師への給与補助の持続	57
4-3-2	日系バイリンガル教師養成のための補助	57
4-3-3	移住地子弟向けの教材開発への補助	57
4-3-4	小規模コミュニティ・センターの設立	57
4-3-5	〔日系国際校〕設立構想への援助問題	58
4-3-6	都市部高校・大学へ進学する移住地子弟への奨学金制度の拡充	58
4-3-7	ボリヴィアにおける日系学生寮の整備と建設	58

4-3-8 現行の移住者子弟上級研修員制度の改善と拡充 .....	59
-----------------------------------	----

附属資料

1. 調査対象者リスト .....	63
2. 持ち帰り資料一覧表 .....	72

# I. 調査団の派遣

## 1. 派遣の経緯と目的

中南米における移住者社会は入植の歴史や自然環境・政治・経済・社会情勢の違い等により、自立安定度に相違はあるものの、戦後の移住地も含め総じて成熟段階に達しつつある。今後、移住者やその子弟を含む日系人は、居住先国においてさらに地域社会の発展に貢献するとともに、対日理解の媒体となり、2国間の相互理解の強化や緊密な友好関係の維持、醸成に寄与することができる貴重な人材である。このため当事業団は教育対策の一環として移住地における学校建設、教師への給与補助など教育環境の整備や、指導教師の派遣、教材開発助成など日系団体が実施している日本語教育に対する側面的援助、また本邦研修制度などを実施してきた。

しかし、日本語教育については移住者の定着促進とともに世代交替が進むに従って家庭でも日本語に接する機会のない二・三世に対するの教授法の変化や父兄の意識の低下、学校運営や教師の待遇など、多くの問題を抱えている。移住者子弟は居住国の教育制度に沿って、できる限り高い教育を受け社会の様々な分野で活躍することが期待されるが、一部の戦後集団移住地においては、現地上級校への進学率の著しい低下や留年などの現象が報告されており、これは子供達にとって日本語の学習が重荷になっているためではないかとの憶測も見られる。

そこで現地における教育の実態を把握し移住者援護事業における教育文化事業の効果的実施を検討するためパラグアイ及びボリビアの戦後の集団移住地において学識者による調査を実施したのが本報告である。

## 2. 調査団の構成

中川文雄	団長	筑波大学	歴史人類学系教授
国本伊代		中央大学	商学部教授
伊藤京子	業務調整	移住事業部	海外事業課職員

## 3. 調査団日程

1990年3月14日～4月13日 31日間

日数	月日	曜日	移動	午前	午後
1	3/14	水	東京発		
2	15	木	サンパウロ着		事務所打合せ、日語普及センター視察、江副教師と懇談
3	16	金	サンパウロ発ーグ ァタパラ (車輛)		グァタパラ移住地視察、日語校訪問、関係者と懇談



日数	月日	曜日	移 動	午 前	午 後
4	17	土	グアタパラサンパウロ (車輛)		
5	18	日	中川：サンパウロ ーブラジリア 国本：サンパウロ	資料整理	
6	19	月	中川：ブラジリア 国本：サンパウロ 伊藤：東京発	リオデジャネイロ事務所 表敬訪問	日本文化協会、日語教育 関係者と懇談
7	20	火	中川：ブラジリア ーリオーサ ンパウロ 国本：サンパウロ 伊藤：サンパウロ 着	日本語普及センターにて 資料収集 (移動)	サンパウロ大学日本語科 教授研修会・シンポジウ ム参加 事務所と打ち合わせ、調 査団、江副日語指導教師 と懇談
8	21	水	サンパウローフォ スドイグアス	(移動)	イグアス事業所と打ち合 わせ 移住地概況説明
9	22	木		エステ、パラナ、イグア ス各日語校訪問 イグアス移住地視察	イグアス日本人会教育関 係者懇談 イグアス西語校視察・懇 談
10	23	金	イグアスーエンカ ルナシオン (車輛)	(移動) ピラポ地区日語 教師と懇談	移住地・日語校視察 エンカルナシオン日語校 視察・懇談 エンカルナシオン領事主 催夕食会
11	24	土	エンカルーフラム (車輛)	チャベス、ラパス各日語 校視察、懇談	移住地・日語校・診療所 視察 エンカルナシオン日本人 会懇談夕食会
12	25	日	エンカルーアスン シオン (車輛)	(移動)	(移動) 三育学院視察・ 懇談 パ日教等教育関係者懇談 夕食会
13	26	月		事務所打ち合わせ アスンシオン日語校、大 使館表敬訪問	イタリア系コレヒオ・ダ ンテ校視察、懇談 中曾根大使主催夕食会
14	27	火	アスンシオンーサ ンタクルス	コレヒオ蔭介石、 アメリカンスクール視察 ・懇談	資料整理、(移動) サンタクルス横川領事主 催夕食会
15	28	水		支所打ち合わせ、領事館 表敬、コレヒオ・アレマ ン視察・懇談	サンタクルス日語校視察、 日語教育関係者と懇談、 サンタクルス学生寮視察 ・入寮者と懇談
16	29	木	サンタクルスー沖 縄移住地 (車両)	(移動) オキナワ事業所職員より 概況説明、メソジスト公 立校視察	コレヒオ・サンフランシ スコザビエル視察 オキナワ第1日ボ校教師 等懇談 診療所大沢医師打ち合わ せ

日数	月日	曜日	移 動	午 前	午 後
17	30	金		オキナワ第1日ボ校視察、オキナワ第2移住地へ移動、ヌエバエスペランサ校、ホ畜総試視察	ヌエバエスペランサ校、同校特別教室視察、教師、運営委員等と懇談
18	31	土	沖縄移住地-サンファン移住地(車輛)	(移動) モンテローにてムユリナ農校、コレヒオマリア視察	(移動) サンファン事業所打ち合わせ、移住地概況説明
19	4/1	日		サンファン日ボ協会にて教育関係者と懇談	サンファン学園教師等と懇談 サンファン移住地国本教授歓迎会
20	2	月		サンファン学園視察、授業参観、伴井家・西沢家訪問・懇談	サンファン公立校視察、懇談 夕刻-国本教授講演会
21	3	火	サンファン移住地-サンタクルス(車輛)	(移動)	調査団打ち合わせ、支所報告 国別調査団との意見交換 夕食会
22	4	水	サンタクルス-ラパス	(移動)	事務所打ち合わせ、大使館表敬訪問 高畑大使主催夕食会
23	5	木		サンファン学園顧問サグラダコラソン校Dr. ラモン懇談	アメリカ文化センター視察・懇談、日本語補習校視察・懇談
24	6	金	ラパス 伊藤：ラパス-リオ	ドンボスコ校視察、懇談 文部省表敬訪問・懇談	(移動)
25	7	土	ラパス-ブエノスアイレス 伊藤：リオデジャネイロ発		(移動)
26	8	日	ブエノスアイレス	ラプラタ学生寮にて学生と懇談	資料整理
27	9	月	ブエノスアイレス 伊藤：東京着		日亜学院視察、日語教育関係者
28	10	火	ブエノス発-リオ		
29	11	水	リオデジャネイロ発		
30	12	木			
31	13	金	東京着		

4. 主要面談者

(1) 日系団体役員

( 国 )	( 団 体 名 )	( 職 位 )	( 氏 名 )
ブラジル	サンパウロ日本語普及センター	理事	柳森 優
		〃	津野 豪臣
		〃	白井
		〃 (書記)	弓桁 正
		評議会副会長	関谷 由忠
	ブラジル日本文化協会 奨学金委員会	副委員長	勝田俊弥
	(サンパウロ)	委員	安立仙一
		〃	高橋信夫
		〃	坂口 孟
		〃	元田
		〃	武田良太
		〃	Suzuki Takeshi
		〃	Kawamura
	グァタパラ 農事文化体育協会	会長	岡田欣一
パラグアイ	全パ日系人連合会 (アスンシオン)	会長	豊歳直之
		総務担当理事	西坂 浮
		教育担当理事	加藤辰夫
		婦人会長	岡本照子
	エンカルナシオン日本人会	副会長	大塚
		事務局長	堀川
		教育担当理事	中塚
	ピラポ日本人会 (アルトパラナ移住地)	副会長	工藤 繁
	チャベス 〃	会長	善村成治
	ラパス 〃	会長	吉田長栄
	イグアス 〃	会長	斉藤栄積
		P T A会長	山田美千良
		事務局長	山西司郎
	エステ市文化協会	会長	岡村
		副会長	田村
		教育担当理事	佐藤
		前会長	藤井

( 国 )	( 団 体 名 )	( 職 位 )	( 氏 名 )
		父兄会長	寺林
	ストロエスネル (パラナ)	育英協会長	滝本
	日本人会	教育担当理事	大西
		副会長	石井
ボリヴィア	サンタクルス日本人会	会長	古木邦夫
		副会長	岡部憲治
		教育担当理事	藤井法正
		P T A会長	比嘉光男
		学校運営委員長	伊集正司
		父兄リーダー	遠野千英他
	オキナワ日ボ協会	事務局長・学生寮寮長	近藤幸雄
		会長	幸地 広
		学校運営委員長	知花松夫
		診療所運営委員長	中田喜正
	サンファン日ボ協会	会長	林 英次
		副会長	沢元静雄
		学校運営委員長	石沢登志夫
		P T A会長	仁田原豊

(2) 日本語教師 (指導教師など含む)

( 国 )	( 学 校 名 等 )	( 職 位 )	( 氏 名 )	( 備 考 )
ブラジル	サンパウロ	日語指導教師	江副隆愛	
	グァタパラ日本語学校	校長	設楽昭五	
		教師	新田	
			渡辺	
			杉本みどり	
			上野	
			近藤	
パラグアイ	アスンシオン	日語シルバー教師	中山昭三	
	日本語学校	校長 (辞任予定)	鍋山儀典	
		次期校長	岡本照子	婦人会長兼務
	三育学院	理事長	栄田祐司	
		校長	栄田寛三	

	エンカルナシオン		松尾やより	
	日本語学校		前原	開発青年
	ピラポ中央日本語学校	校長	宮崎	
	ピラポ第1	”	篠藤正志	
	” 第2	”	園田メグム	
	富美村	”	鈴木峯子	
	ラパス	”	小倉正義	
		教師	田中	
		”	菅野	開発青年
	チャベス日本語学校	校長	善村郁代	
		教師	松宮由紀	
	エステ日本語学校	”	伊藤	
	ストロエスネル(パラ	”	高橋香代子	
	ナ)日本語学校	”	藤井	
	イグアス	校長	佐藤邦夫	
		教師	小見山	天理教派遣教師
		”	上之山幸代	開発青年
ボリヴィア	サンタクルス	日語指導教師	河村 透	
	サンタクルス日本語学	教頭	志賀美和子	
	校	教師	喜瀬洋子	
		”	田中郁子	専門家夫人
		”	星野明子	
	オキナワ第1日ボ校	校長	大熊豊子	
		教師	星川和男	元開発青年
		”	宮城ゆみこ	
		”	山内ともこ	
		”	金城 昇	
	ヌエバエスペランサ校	校長	山城徳子	
		教師	島袋小百合	ボ国免許取得者
		”	竹山シマ子	
		”	松下春江	
		”	宮里哲夫	オキナワ県派遣教師
	サンファン学園	”	高野知恵子	ボ国免許取得者
		”	下地美樹	ボ国免許取得者

	ラパス補習校	教師代表	小森三重子
アルゼン	日亜学院	校長	関口伸治 元開発青年
ティン			

(3) 現地教師

( 国 )	( 学 校 名 等 )	( 職 位 )	( 氏 名 )
パラグアイ	イグアス西語小学校	校長	Sra. A. B. Aquino
	” 中学校	”	Sra. S. Nakayama (日系2世)
	ラパス西語小学校	”	
	Dante Alighieri 伊	Director Secretaria	Fiorello Picorilli
	Colegio Americano 米	Director Asst. Director	Dr. Ralph Davia Mrs. Maria Elisa Parquet
	Colegio Chiang Kai-shek	数学教師・主任	帳俊堯
ボリヴィア	Colegio Alemán de Santa Cruz	Director Sub-Directora	Norbert Kulmsee Emma de Da Silva
	オキナワ第1メソジスト公立校	Director	Welter Dominguez Alpire (事業団国際協力功労賞受賞者)
	サンファン学園	Director 数学教師	Prof. Efrain Melgarejo Prof. Jorge
アルゼン	Instituto Privado Argentino Japonés	校長 教頭	Sara Rosario Castello Isabel Saenz
ティン	(日亜学院)		

4. 大使館関係者・その他

( 国 )	( 所 属 )	( 職 位 )	( 氏 名 )
パラグアイ	大使館	大使 参事官	中曾根悟郎 船越 博
	エンカルナシオン領事館	領事 参事官	縫村 義則
ボリヴィア	大使館	大使	高畑敏男 桑名
	サンタクルス領事館	領事	横川 実

文部省

Dr. Julio Rojas

サグラダコラソン学校連盟 (サンファン  
学園顧問)

Augusto Roman Padilla

ラパス市在住サンファン  
移住地出身者

佐久間貞二 ラパス市内で日本語

田中清彦 教育に強い関心を抱

古木敏弘 く世代の代表として

## Ⅱ． 調査報告

### はじめに

本調査は、パラグアイおよびボリビアの戦後集団移住地における移住者子弟をめぐる教育環境の現況を把握し、今後の移住地での教育と人材育成に何らかの展望を与える目的でなされた。調査の発端は、近年ボリビアの移住地で移住者子弟の学力低下が目立ち、高校から入学を拒否される例、あるいは入学しても中途退学するものが目立つようになったことにある。この状況は、かつて移住者子弟が、進学した学校で最高の成績を修めることが多かったのと対照的である。

学力低下の原因は、極めて多面的であった。移住地初期の教育重視の厳しい日本的倫理がしだいに弱まっていくと同時に（それは他面では教育は個人的な幸福にはつながらないとする、ボリビア社会の伝統的な考え方が移住者子弟に徐々に浸透することであるが）、富裕化、電化、ビデオの導入などが子供の勉強に対する態度を変え、さらに、もともと劣悪であったボリビア農村部での学校教育の水準と教師の質が、1980年代の超インフレ下での教師ストライキによって、授業日数が必要とされる半分にも満たないという不幸な事態により一層悪化した等々、多くの要因が作用しあって学力低下を生んだ。

以上の要因に加えて、日本語とスペイン語の双方を学習することが生徒にとって過重な負担になっているのではないか、ないしは混乱を起しているのではないか、あるいは日本語学習に重心がかかりすぎるために学校でのスペイン語による授業が疎かになっているのではないか、それが学力低下の底流をなしているのではないかという疑惑が、移住地から示されている。しかし、これらの疑惑ないし危惧は、のちに詳述するように根拠が薄弱であるといってよい。これまでの経験が語る所では、母語である日本語の学習をきちっとやった生徒ほど、スペイン語の読み書きや、一般的な学力が高くなる傾向が認められるからである。近年の学力低下は、2言語を学ぶことの負担によるものではなく、前記の多様な要因によるものである。

学力低下と学校教育現場の無規律から脱却すべく、サンファン移住地とオキナワ第1移住地では日本人会が指導権をとって、ともに1987年に私立学校を設立し、スペイン語課程、日本語課程双方の質の向上をはかってきた。その成果に確定的な評価を与えるには時期尚早であるが、幾つかの学年で学力の向上はすでに認められている。ただし両移住地の新設私立学校は、経済的負担の大きさ、ボリビア人子弟からの分断など、問題を残しており、これらの学校の将来をも含めて移住地子弟の教育はいかにあるべきか、移住地とそこから派生する日系社会の将来にとっていかなる子弟教育が必要なのかが、今問われている。

同じボリビアの中でもラパス市に在住する日系子弟の場合、高校での学力水準は高く、大学進学率も高い。移住地とは大きく異なった状況におかれている。

一方、パラグアイでは、移住地での学力低下はボリビアほど大きな問題となっていない。イ



グアス移住地の場合、高校進学率がほぼ100%、大学進学率は約5%で、この数字はパラグアイの農村部にあっては、ずばぬけて高いものである。しかし、都市部も含めて全般的にみて、大学進学率において日系子弟は、中国人、韓国人子弟に比してはるかに低いのが現状であり、また日本人子弟が数学に強いという定説はもはや通用しないといわれる。

パラグアイ及びボリビアのいずれの場合も、集団移住後30余年を経た今日、移住者子弟をめぐる環境は大きく変化した。そうした変化を踏まえた上で、移住者子弟にとって、また移住地、日系社会の未来にとっていかなる教育が必要とされるかが明らかにされねばならない。日本語教育もそうした文脈の中で、また、移住者子弟の全般的な知的社会的発展との関連において、位置づけられねばならない。

以上のような課題に応えることが、今回の調査の目的であった。今回の調査が、日本語教育専門家ではなく移住地の歴史と相手国の文化と社会の研究に従事してきた私たちに依頼されたのは、こうした理由からである。もちろん、日本語教育の現況について、私たちの立場からの気づいた点の素描と分析は、本報告書でも行っている。両国での日本語教育の実態と技術的側面に関して、JICA派遣日本語教育専門家による調査報告書が随時刊行され、またレポートも発表されているので、それらをも参照していただきたい。(注1)

今回の調査の主たる対象はパラグアイとボリビアの集団移住地であるが、比較の目的で、同じく戦後集団移住地であるブラジルのグェタパラ移住地と日・西2言語併用教育の先駆的存在であるアルゼンティンのブエノスアイレス市にある日亜学院も、私たちは訪問した。そこでの調査から得られた知見は、まとまった形ではこの報告書に述べられていないが、報告書の随所にそれが反映されている。

最後に、パラグアイとボリビアでの西語教育と日語教育での学年段階構成について述べておく必要がある。西語教育は、パラグアイでは小学校(Primaria)6年と中学校(Secundaria)6年の2段階に分かれ、その下と上に幼稚園及び大学がおかれているが、中学校は前半が基礎教育課程となっており、後半は専門別課程となっている。一方、ボリビアでは、小学校(Básico)5年、中学校(Intermedio)3年、高校(Medio)4年の3段階に分かれており、この下に幼稚園、上に大学がある。義務教育年数は、パラグアイが6年で、ボリビアが8年である。

一方、日本語教育では、年齢よりも日語能力によって学年(ボリビアではそれを組と呼ぶところもある)を編成する日語校と、西語校の学年に準ずる日語校とがある。通常、幼稚園(最長

---

(注1) 『中南米及びカナダ移住者子弟の日本語調査報告』(JICA業務資料 No558, 1980年2月);

『南米三ヶ国における日本語教育調査報告書』(JICA業務資料 No614, 1981年6月); 『南米(主としてブラジル)における日本語教育事情調査指導報告書』(JICA 移海外JR82-9, 1982年8月); 内海寛浩『パラグアイの日本語教育 ― 日本語指導教師の活動を通じて』(国際協力事業団パラグアイ事務所 1989年10月)

3年)、小学校（パラグアイでは6年、ボリヴィアでは5年）、中学校（3年）の構成をとり（中学部のない日語校もある）、普通はこれまでである。ただし、例外的に高校が存在するところがある。このように学年の呼び方は、西語校だけでもパラグアイとボリヴィアで異なり、また同一国の西語校と日語校の間でも、日語校間でも異なるため、本報告書では、生徒の学年に言及する場合特に断らない限り、日本の6・3・3制に対応した学年であらわすよう統一した。

# 1. パラグアイ及びボリヴィア日系社会における日本語教育の現状

## 1-1 日系社会における日本語使用の現状

私たちは、パラグアイ及びボリヴィアの日系社会における日本語教育の現状を視察するにあたり、アンケート調査を実施することにした。調査表は、本報告の巻末に添付したように、(1)家庭内における日本語の使用状況、(2)子供の日本語教育に対する親の姿勢、(3)子弟教育に対する日系社会の意識、及び(4)日系子弟の高等教育機関への進学状況を知るための設問などから成っている。

アンケート調査表の配布と回収については、私たちが訪問する予定の移住地の日系人家庭に日本人会あるいは日本語学校の連絡網を通じて事前に配布してもらい(結果として都市部の日系人家庭の一部にも配布された)、私たちの現地訪問時に一部を除いて回収した。各日系社会に配布されて回収されたアンケート調査表の数は、表-1にまとめた通りである。

表-1 アンケート調査表「移住地内日系人の教育に関する基礎資料」配布数と回収率

地 域	配布数	回収数	回収率 (%)
*イグアス移住地	110	86	78.2
*ピラポ移住地	211	184	87.2
フラム移住地	142	134	94.4
チャベス移住地	32	31	96.9
エステ市 (旧ストロエスネル)	33	26	78.8
エンカルナシオン市	76	63	82.9
サンファン移住地	202	139	68.8
オキナワ移住地	176	150	85.2 (93追加)
*サンタクルス市	56	50	89.3
*ラパス市	20	17	85.0
合 計	1,058	880	83.2

\*印：日本語学校を通じて調査表が配布された。その他は日本人会による。

日本語学校に配布を依頼したため、子供を日本語学校に通わせている家庭のみが回答したイグアス移住地、ピラポ移住地、サンタクルス市およびラパス市の調査結果が日系社会の全般的な状況を反映していないことは明らかである。また、同表で示されているように、オキナワ移住地に関しては、私たちの現地訪問時には回収率が極端に悪く、その後に回収されて日本に送られてきた多数のアンケート表(93戸分)が含まれているが、これらについては記入の仕方に疑問があり資料として使用するには問題のあることがわかった。しかし、その他の日本人会を通じて全家庭に調査表が配布され回収された各移住地については、日系社会における日本語使用と教育の状況及び子弟教育に対する日系社会の意識などが比較的正確に反映されていると考えられる。

今回の調査でわかったことは、家庭内における日本語の地位が急速に変化しつつあることである。日本語の使用率に関しては、表-2に示した1985年に行なわれた調査と表-3にまとめた今

回の調査結果を比べると、家庭内における日本語使用率が大雑把にみてもかなり低下していることがわかる。事実、私たちの現地訪問の折に指摘されたことは、家庭内で日本語が使われているといっても大抵の家庭では親と話をする時子供たちは日本語を話すか、兄弟で会話を交わす時、また友達とお喋りをする時は日本語とスペイン語を混ぜて話すか、スペイン語であるということであった。その中でも1985年に家庭内使用言語が100%日本語であったサンファン移住地において、そのような指摘が移住地内の有識者からなされたことは興味深かった。サンファン移住地における今回のアンケートでは、「日本語だけ」とするものは50%を割っており、「主として日本語」という家庭を合計しても88%となっている。このサンファン移住地の例から考えても、家庭内での使用言語としての日本語はスペイン語の解らない親と子供の会話で使用されているが、日常の家庭生活の中に相当スペイン語が入り込んできていることが推察出来よう。ボリヴィアの2つの移住地に対して、パラグアイのイグアス移住地とピラボ移住地では日本語の地位はまだかなり高いことがわかる。

表-2 パラグアイとボリヴィアの日系家庭における日本語使用率（1985年）

地 区	家庭内日本語使用率
イグアス移住地日本語小・中学校	99%
ピラボ移住地日本語学校6校	90～99%
フラム移住地日本語学校4校	85～95%
チャベス移住地	80%
ストロエスネル日本語学校	86%
エンカルナシオン日本語小・中学校	99%
アスンシオン日本語小・中学校	86～91%
サンファン移住地日本語小・中学校	100%
オキナワ第1日本語幼・小・中学校	男子20%：女子90%
オキナワ第2日本語小・中学校	70%
サンタクルス日本語普及小・中学校	70%
ラパス日本語補習授業校	50%

「出所」国際協力事業団移住事業部『南米及びカナダにおける移住者子弟の為の日本語学校概況調査』（1986年）、12-19頁。

表-3 日系人家庭における言語生活の現状（1990年）

(%)

地 域	日本語だけ	主として日本語	日語と西語半々	主としてスペイン語
イグアス移住地	67.4	24.4	6.6	0
ピラボ移住地	66.3	25.0	7.6	1.0
フラム移住地	55.9	35.0	5.9	2.9
チャベス移住地	38.7	32.2	22.5	6.4
エステ市	57.6	23.0	7.6	11.5
エンカルナシオン市	23.8	44.4	20.6	7.9
サンファン移住地	48.9	38.8	5.7	4.3
オキナワ移住地	40.6	41.3	16.6	1.3
サンタクルス市	18.0	32.0	22.0	28.0
ラパス市	23.5	41.0	23.5	11.7
平均	49.9	33.8	11.1	4.5

「出所」アンケート調査表「移住地内日系人の教育に関する基礎資料」設問2。

このような日本語使用の現況の中で日系社会の日本語教育に対する熱意は極めて高いというのが、現地訪問のさまざまな機会を通じて私たちが受けた強い印象である。過度の経済的負担や教師不足など多くの障害があるにもかかわらず、日本語教育の運営主体である日本人会（自治会）も、また日本語教師たちも、日本語教育に対して極めて高い熱意を持っている。一般に親たちが考えている子供に対する日本語教育の必要性は、アンケート調査では「日系人であるから当然日本語を覚えるべきである」という素朴な態度が圧倒的多数を占めている（表-4）。しかし、「将来役に立つから」という認識もかなり高く、近年急増している日本への出稼ぎ現象もそのような認識に拍車をかけていると指摘する声も聞かれた。同時に、日系社会の中で、あるいは周辺で生活するパラグアイ人やボリヴィア人の間からも日本語を学びたいとする人々が少数ではあるが現れてきており、単に日本人の子であるから日本語を学ばせるのだという情緒的な親の願望だけでなく、日本語習得の動機と目的が明確になりつつあるのは確かである。

表-4 日本語教育の必要性に関する意識（1990年）

(%)

地 域	日系人として 当然必要	将来役に 立つから	子供が希 望するから	必要なし
イグアス移住地	84.8	11.5	1.1	0.0
ピラポ移住地	74.4	21.3	0.0	0.0
フラム移住地	77.6	28.0	0.7	0.0
チャベス移住地	74.1	23.5	3.2	3.3
エステ市	84.6	13.9	3.8	0.0
エンカルナシオン市	76.1	25.0	0.0	1.5
サンファン移住地	78.4	21.6	1.4	2.8
オキナワ移住地	77.3	19.3	1.3	0.0
サンタクルス市	72.6	11.5	0.0	0.0
ラパス市	76.4	22.2	0.0	0.0
平 均	77.4	20.0	0.9	0.7

「出所」アンケート調査表「移住地内日系人の教育に関する基礎資料」設問4。

しかし、親たちの子供に対する日本語教育の必要性に関する意識が高い割には、表-5が示すように、子供たちの日本語教育を学校にすべてまかせているという家庭が決して少なくない。特に、イグアス移住地やピラポ移住地およびエステ市ではその割合が高い。他方、家庭内での日本語教育が大切であるとする意識もかなりあることが同表からわかる。都市部であるボリヴィアのサンタクルス市とラパス市では、日本語学校に子供を通わせている家庭を対象にして調査が行われたことからすれば、同表に現れたその高い関心度と実践（意識して正しい日本語を使うという努力をしている）は当然であると言ってもよいが、チャベス移住地とオキナワ移住地のそれが極めて高いことは注目を引こう。

チャベス移住地は、表-1でもわかるように、戸数の少ない移住地であり、エンカルナシオン市への交通の便もよく、やがては住宅を市内に移し、通い農的営農形態をとることになるのではないかという展望が私たちの訪問の折に示されたが、他の大規模集団移住地とはかなり性格を異

にしており、生活および意識が都市部日系社会型に移行しつつあるといえる。

表-5 日系人の家庭内における日本語教育（1990年）

(%)

地 域	意識して正しい日本語を使う	日本語の勉強をさせている	日本語学校にすべて任せている
イグアス移住地	32.5	34.8	31.4
ピラポ移住地	32.0	36.9	30.4
フラム移住地	35.0	40.3	23.8
チャベス移住地	61.2	19.3	19.3
エステ市	30.7	30.7	34.6
エンカルナシオン市	39.6	39.6	14.2
サンファン移住地	33.8	38.1	16.5
オキナワ移住地	60.0	30.6	8.6
サンタクルス市	50.5	26.0	24.0
ラパス市	64.7	23.5	11.7
平 均	40.8	34.9	21.5

「出所」アンケート調査表「移住地内日系人の教育に関する基礎資料」設問3。

他方、オキナワ移住地の状況に関しては、アンケートの回答の仕方に疑問点があったことを先に指摘したが、筆者自身（国本）も参加した1982年の調査経験（注2）と今回の現地調査で得られた資料を比較すると、日本語に関するオキナワ移住地日系社会の状況は大きく変化していた。当時のオキナワ移住地では二世の日本語能力はサンファン移住地と比較して著しく低く、青年団員の談話では日本語が通じにくかった。また、ボリビア社会への同化の度合いが著しく、サンファン移住地社会と極めて対照的な状態であった。しかし、それから8年後の今回の調査訪問の折に受けた強い印象は、日本語教育に取り組む熱意と実際に変貌した教育現場の姿とであった。ここではその状況を詳しく報告する余裕はないが、後述するようにオキナワ第1移住地では私立学校が設立されており（1987年開校）、日系子弟のほとんどを収容して西・日両語による教育を著しく強化している。さらに、学校設備の充実や日本語教師派遣など母県である沖縄県の援助と支援が実現しており、その上移住地の一世や二世たちの多くが日本へ出稼ぎに行きその成果が立派な新築の家や所有農地の拡大といった、目に見える形で実を結んでいることなどから、オキナワ移住地が日本への「回帰傾向」を近年急速に強めてきたその結果が日本語教育の強化となったのではないかと筆者（国本）には思われた。

しかしながら、このように日本語に対する関心が一層高まってきているとはいえ、子供たちが毎日通う正規の学校生活がスペイン語世界であることからくる影響は、予想以上に大きかった。日本人が集団で居住している移住地内の小・中学校に通う子供たちですら、子供たち同士の会話になるとスペイン語が中心になっている。ここからも、日系社会における日本語教育の問題の難

（注2）1982年度文部省海外学術調査補助金を受けた「ボリビア日系人学術調査」隊の一員として同年7-9月現地調査に参加した。

しさが理解できる。日系社会の日本語教育の問題は、家庭内での努力と日本語学校での学習という二者並列での努力が欠くべからざるものであることは今更指摘するまでもない。そして、今回の訪問で得られたような比較的高い日本語教育に対する両者(家庭と学校)の関心にもかかわらず、中・長期的な視野で見れば日系社会の言語生活は、日・西語併存になり、その後西語優勢となろう。しかし、移住地によっては相当長期間にわたって日本語優越を保ちうるのではないだろうか。

## 1-2 日本語学校の運営主体と運営の状況

表-6は、今回私たちが訪問した日本語学校について運営の側面から資料をまとめたものである。アスンシオン市の三育学院とボリヴィア・ラパス市の補習授業校の2ヵ所を除くと、実際の

表-6 日本語学校の運営主体と校舎の種類および生徒数

1990年3月

地区別学校名	運営主体	独立校舎の有無	生徒数徒
イグアス移住地 イグアス日本語学校	日本人会	有 レンガ造り	249
ピラポ移住地 ピラポ中央日本語学校 ピラポ第1日本語学校 ピラポ第2日本語学校 富美村日本語学校	日本人会 日本人会 日本人会 日本人会	有 木造 有 木造 有 借 レンガ造り 有 借 レンガ造り	131 52 44 103
フラム移住地 ラパス日本語学校 富士分校	日本人会 日本人会	有 レンガ作り 有 レンガ作り	100 23
チャベス移住地 チャベス中央日本語学校	日本人会	有 レンガ造り	12
エステ市 エステ日本語学校 パラナ日本語学校	日本人会 日本人会	有 レンガ作り 有 レンガ作り	46 17
エンカルナシオン市 エンカルナシオン日本語学校	日本人会	有 レンガ造り	95
アスンシオン市 アスンシオン日本語学校 パラグエイ三育学院	日本人会 アドベント教会	有 レンガ造り 有 レンガ造り	141 123
サンファン移住地 サンファン学園	日本人会	有 西語校と共有 レンガ作り	141
オキナワ移住地 オキナワ第1日ボ学校 ヌエバ・エスペランサ	オキナワ 第1日本人会 オキナワ 第2日本人会	有 西語校と共有 レンガ造り 有 西語校と共有 レンガ造り	87 63
サンタクルス市 サンタクルス日本語学校	中央日本人会	無 日本人会館借用 レンガ造り	112
ラパス市 ラパス日本語補習授業校	文部省海外 教育施設	無 日本人会館借用 レンガ造り	48

名称はさまざまであれ、すべて日本人会（自治会）が運営主体となっており、地域日系社会全体が日本語学校を支えている。したがって、現状では経営的に成り立たないような規模の学校が、授業料および地域の日系社会全体の支えとJICAの補助金によって運営されているのが実状である。

日本語学校の規模に関しては、生徒数が最少のチャベス日本語学校の12名からイグアス日本語学校の249名まで大きな差があることからわかるように、日本語学校の運営の現状は、生徒の数をとって授業形態をとっても、さまざまである。しかし、集団移住地の日本語学校はいずれも移住地建設以来運営されてきたという長い歴史を持っているだけに、独自のレンガ造りの校舎を所有する日系地域社会が半数以上にのぼるほか、西語学校の校舎を借用するか共有している場合でも（そのほとんどはJICAの援助を受けて移住地日系社会が建てたものである）、学校の建物や机と椅子および黒板などの基礎設備は既に備っているだけでなく、表-7にみるように生徒数だけから推定すると小規模の塾的な学校であっても、かなりの教材備品を備えていることがわかる。

表-7 日本語学校における主要教材・教具状況

1985年現在

地区別学校名	所有する主要教材及び教具
イグアス日本語学校	図書(500冊)、スライド機、ビデオ、ステレオ、とび箱セット、サッカー・ゴール
ピラポ中央日本語学校	図書(300冊)、地図(世界・日本)、国語掛図、歴史年表、紙芝居、地球儀、ビデオデッキ、テーブ
ピラポ第1日本語	図書(100冊)、地図(世界・日本)、地球儀、国語掛図、紙芝居、国語カード、ビデオセット
ピラポ第2日本語	図書(400冊)、地図(世界・日本)、紙芝居、国語掛図、カセットテープ、ビデオ、とび箱
富美村日本語学校	図書(300冊)、地図(世界・日本)、ラジカセ、とび箱
ラパス日本語学校*	図書(1,350冊)、絵カード、紙芝居、ミシン、プラスチックバンド、地図、国語掛図、スライド、オルガン
ラパス富士分校	紙芝居、幻燈機、スライド、テープレコーダー、ビデオセット
チャベス中央日本語学校	図書(300)、地図、紙芝居、国語掛図、カタカナカード、テーブ・レコーダー
ストロエスネル日本語学校	図書(250冊)、国語掛図、世界地図、紙芝居、カセット、ピアノ等音楽用具、
エンカルナシオン日本語学校	図書(200冊)、ひらがな・カタカナ・漢字掛図、紙芝居
アスンシオン日本語学校	図書(300冊)、紙芝居、地図(世界・日本)、漢字カード、地球儀、つみ木、カセット、オルガン、ハーモニカ、マット
パラグアイ三育学院	図書(500冊)、紙芝居、スライド、ピアノ、笛、アコーディオン、ビデオ
サンファン学園	輪転機、和文タイプ、VTR一式、小型ステレオ、オルガン、スライド、紙芝居、謄写機、小楽器



地区別学校名	所有する主要教材及び教具
オキナワ第1日ボ学校	辞書、テレビ、紙芝居、地図、テープレコーダー、スライド、クレヨン、絵の具
ヌエバ・エスペランサ (オキナワ第2日本語学校)	紙芝居、辞書、ビデオデッキ、電気オルガン、楽器類、テープレコーダー、カセット、FAX、謄写機、野球・卓球用具、習字用具、地球儀、算盤、地図、歴史年表、五十音図
サンタクルス日本語学校	紙芝居、スライド、ビデオ、辞書、テープレコーダ、カセット、FAX、謄写機、習字用具、地球儀、地図、掛図類、サッカーボール
ラパス日本語補習授業校	輪転機、和文タイプ、VTR一式、小型ステレオ、オルガン、スライド、謄写機、楽器類

\* 印 フラム移住地3校を合計  
 [出所] 国際協力事業団移住事業部「南米及びカナダにおける移住地子弟の為の日本語学校概況調査」(1986年)、12-19頁。

例えば、チャベス移住地では公民館の一部を日本語教室として使用しているが、巻頭の写真(8)でもわかるように、私たちが訪問した日本語学校施設の中でも教室としてよく整った状況を呈していた。また、ボリヴィアのサンファン学園の場合、他の移住地の日本語学校とはやや基準が異なるが(サンファン学園は日本語が正規科目の外国語として位置づけられている唯一の学校で単なる日本語学校ではない)、一般教室の他に図書室、視聴覚教室、実験室および音楽室、保健室がそれぞれ独立してあり、その管理もよくいきとどいている印象を受けた(写真17~19)。これらチャベスやサンファン移住地の他の地域でも、学校設備に関しては生徒数だけから判断する日本語学校という印象とは異なって、正規の学校設備に等しいものであることが実際に訪問してわかった。そして、それらの学校設備が十分に満足出来る水準であるとは言わないが、生徒を十分に収容出来る教室の数、机と椅子、黒板、地図や掛図類、日本語図書などの基礎的な備品はかなり整っていて、教室としての設備はある程度満足する水準にあるのではないかと思われた。オルガン、テープ・レコーダー、スライドやビデオ・デッキなどを所有する学校が、資料はやや古い表-7でみるように少なくないことがわかる。総括すると、移住地の日本語学校は、教室内も殺風景な現地学校(西語校)と異なり(写真12)、巻頭に掲載したいくつかの写真でもわかるように地図類や生徒たちの作品などがきれいに展示されていて、日本語を学ぶためのインセンティブがさまざまに工夫されている。

教育設備の点ではこのような状態にある日本語学校は、運営の実態からみると、例外を除いて学校の形態をなしていない。この状況については、JICAが派遣する日本語指導教師によっても指摘されているが(注3)、私たちも各学校訪問と関係者との懇談を通じてその印象を強くした。さまざまな理由を挙げることが出来るが、まず最も重要な点は、運営主体にも教員組織にも学校運営に関する組織と呼べるような体系的な組織が出来ていないことである。

(注3) 内海前掲書、30頁。

まず運営主体に関しては、日本語学校の運営責任者の立場にある各日本人会（自治体）の教育委員会は日本人会メンバーの中から選出される人々であり、持ち回りの選出されるボランティア的委員である。したがって、中・長期的な展望を持って日本語学校の運営を担当する視野や意欲を持って任務を遂行する人の方が少ないであろうし、事実、名ばかりの運営委員や委員長が少なくないように思われた。また、日本人会の中に常設の運営委員会事務局がないので、運営委員会の仕事を十分に補佐するための資料を作成したり助言する者がいない。したがって、日本語教師の後継者養成であるとか、設備など教育現場への中・長期的な展望に基づいた計画的な学校運営ができにくい。

日本語学校の多くが学校の形態を成していない第2の理由は、教員組織の欠如にある。日本語学校校長とか日本語主任という地位があるが、日本語学校の教育全体を任せられているわけではない。多くの学校で教員間の関係が十分でなく、教育の現場を知らない教育委員会が力を持っているように見受けられた。

第3の理由は、日本語教師そのものにある。日本語教師は、少数の専任教員を除くと、大多数が教師不足のためにかり出された教師未経験者であり、学校の組織的運営に関して積極的な任務を果たすような姿勢に欠け、また、その役割も与えられていない。本人の素朴な熱意を別にして、日本から派遣された日本語指導教師が期待するような体系的な日本語教育を担うには、あまりにも準備不足であるだけでなく、またそのような仕事をする程の待遇も受けていない。JICAが派遣している日本語指導教師たちは、指導要録、通知表、年間行事計画、年間指導計画などの作成を現場の教師たちに指導してきたが、現実にはほとんど作成されないと指摘されている(注4)。もっとも、私たちは、オキナワ第1と第2移住地およびサンファン移住地では、きちんとまとめられた要録などの資料をいただいた。

私たちが懇談した現場の日本語教師たちは、いずれも善意と熱意に溢れた教師であったが、その多くの教師たちの役割はボランティア教師であると言っても過言ではなかった。日本語教師が老齢化して退職したり、日本へ出稼ぎに行ったあとを埋めているのは、だいたい家庭の主婦であった。教師が突然出稼ぎで退職したために、かり出された主婦もいた。教師不足の問題は、どの日本語学校においても、日本語の出来る比較的年齢の若い一世が日本へ出稼ぎに出たり、一世の高齢化で教師を引き受ける人たちが激減している中で、極めて深刻な状況を呈していた。

以上のような学校運営に関する問題の根底にあるのは、経済的な問題である。日本語学校を充実させようと考えればそれだけの経費が必要であるが、それを賄えない日系社会の現実がある。地域全体が支えているとはいえ、日本語教師に対して支払われる給与が家族を養っていける額でないのは、どこの日本語学校でも同じである。したがって、職業としての日本語教師は成立しがたい。移住者たちは日本語教育の必要を認めているが、日本語教師の給与に対しては理解がやや

---

(注4) 内海前掲書および私たちの調査時の懇談より。

足りないようだ。もっとも、オキナワ第1移住地やサンファン移住地のように、教育の高額負担を覚悟の上で日本人会を運営主体として正規の学校そのものを完全な私立校にし、その枠内で独自の日本語教育を実施している日系社会があるが、これらの移住地では日系人口が減少する傾向がある現在、学校そのものの存在さえ岐路に立たされているほど教育費の負担は大きくなっている。

### 1-3 日本語教育のプログラム

表-8は、各日本語学校の生徒数（1990年3月現在）と1989年度に実施された年間授業時間数をまとめたものである。総授業時間数に関しては、ラパス補習校の68時間からオキナワ第1日ボ学校の632時間まで大きな幅があることがわかる。前者は日本の文部省海外教育施設であり、集団移住地内の日本語学校とは性格が異なる。この補習校を除く移住地内の日本語学校だけみても、オキナワ第1日ボ学校の632時間からラパス富士分校の210時間までの幅があり、日本語学校の授業内容に相当の差異があることが推察できよう。

表-8 日本語学校の生徒数と年間授業時間数の比較

地区別日本語学校名	生徒数				総授業 時間数	日本語授 業時間数	
	日系	混血	非日系	合計			
イグアス移住地 イグアス日本語学校	小学校	124	19	9	152	390	248
	中学校	64	3	0	67	390	260
	その他	0	0	5	5	不明	不明
	高校	25	0	0	25	138	不明
ピラポ移住地 ピラポ中央日本語学校	小学校	48	3	3	54	380	330
	中学校	75	0	2	77	380	280
	ピラポ第1日本語 小学校	46	2	4	52	240	210
	ピラポ第2日本語 小学校	39	5	0	44	220	220
	富美村日本語学校 中学校	64	5	5	74	300	280
		29	0	0	29	300	280
フラム移住地 ラパス日本語学校	小学校	60	6	2	68	267	227
	中学校	32	0	0	32	258	198
	富士分校 小学校	22	1	0	23	210	210
チャベス移住地 チャベス中央日本語学校	幼稚園	2	0	0	2	不明	不明
	小学校	10	0	0	10	350	350
	中学校	-	-	-	-		
エステ市 エステ市日本語学校	幼稚園	4	4	5	13	300	264
	小学校	13	9	6	28	300	不明
	中学校	5	0	0	5	300	不明
	パラナ日本語学校 (旧ストロエスネル 日本人会日語校)	9	6	1	16	464	341
	中学校	1	0	0	1	464	341
エンカルナシオン市 エンカルナシオン 日本語学校	幼稚園	8	1	0	9	380	不明
	小学校	52	11	3	66	300	300
	中学校	20	0	0	20	294	294

地区別日本語学校名	生徒数				総授業 時間数	日本語授 業時間数	
	日系	混血	非日系	合計			
アスンシオン市 アスンシオン 日本語学校  パラグアイ三育学院	幼稚園	16	7	0	23	不明	不明
	小学校	76	14	0	90	不明	不明
	中学校	24	2	0	26	不明	不明
	その他	2	0	0	2	不明	不明
	小学校	62	14	9	85	270	162
	中学校	19	0	0	19	270	218
	高校 その他	7 2	0 1	0 9	7 12	不明 不明	不明 不明
サンファン移住地 サンファン学園	小学校	77	8	5	90	320	320
	中学校	46	4	1	51	240	240
オキナワ移住地 オキナワ第1日ボ学校  ヌエバ・エスペランサ 小・中学校	幼稚園	7	5	8	20	433*	—
	小学校	36	1	3	40	623	356
	中学校	25	1	1	27	623	374
	幼稚園	4	3	0	7	257	—
	小学校 中学校	30 22	2 2	(38)** (18)**	32 24	387 571	不明 不明
サンタクルス市 サンタクルス 日本語学校	幼稚園	5	4	0	9	268	—
	小学部	72	19	0	91	268	169
	中学部	12	0	0	12	268	169
ラパス市 ラパス補習学校	幼稚園	6	4	0	10	68	—
	小学校	26	7	0	33	68	45
	中学校	2	0	0	2	68	55
	通信教育部	3	0	0	3	不明	不明

\* 印 小学校低学年を含む      \*\* 日本語授業は受けていない。  
「出所」1990年アンケート調査表「日本語学校運営に関する基礎資料」より。

同表に示されている総時間数の多い学校は、日本語授業の他にいくつかの科目を日本語で行なっている。しかし、いわゆる「国語」の授業時間数だけに限っても、小・中学校のレベルでの日本語の授業時間数については、最少年間授業時間数がパラグアイ三育学院の162時間で、最大年間授業時間数はオキナワ第1日ボ学校の356時間となっており、この間にはやはり倍以上の開きがあることがわかる。

日本語授業以外に教えられている科目については、それらの科目を取り入れている学校の多い順から、体育（12校）、音楽（9校）、図工（7校）、算数・数学（2校）、社会（1校）および書道（1校）が教えられている。その他に生徒会活動や宗教・道徳などの時間を設けている学校が4校あった。しかし、これらの授業も日本語で行なわれていることからすれば、総授業時間数が日本語授業の時間数であるとも考えることも出来る。さらに、日本語学校が「日系社会の子弟教育機関」として次のような重要な機能を果たしていることに言及しなければならない。

まず、日本語学校は日系人子弟の重要な情操教育の場ともなっていることである。ラテンアメリカ社会では、伝統的に学校を教師による知識の伝達の間としてとらえ、情操教育を学校教育に

含めないのが一般的である。このような社会の中で、多くの日本語学校は時間が許す限り音楽や図工などの情操教育を取り入れる努力をしている。音楽を取り入れている学校では、だいたい小・中学生ともに習うようになっており、この音楽の時間では日本の唱歌を教えるほか、楽器演奏の練習を行うところもある。しかし、どの日本語学校にもオルガンやピアノがあるわけではなく、またあったとしても素人の教師がみな上手に演奏でき唱歌を教えることが出来るというわけにはいかない。私たちが訪れたパラグアイの移住地では、近隣の現地校に派遣された音楽を専門とする青年海外協力隊員が日本人移住地に対しても協力出来るような制度の実現を願う声が聞かれた。現行では隊員のボランティア精神に依存する以外方法はない。

一方、図工は、音楽と異なり、主として小学部で取り入れられている科目である。生徒たちのクレヨン画の作品が私たちが訪問した学校の教室に展示されていたり、また日本の学童絵画展へ出品するなどの努力も学校によっては行われている。

これらの科目のほかに、イグアス日本語学校が行っている剣道とラパス日本語学校の日本史および富美村日本語学校の書道が特徴ある科目である。イグアス日本語学校では中学部の体育の時間に剣道を導入しているが、「規律を守り礼儀正しい日系人」の養成を目指すものとして年間40時間がこれに当てられている。一方、ラパス日本語学校では中学生を対象として、日本史を年間30時間教えている。同じく富美村日本語学校では中学生に年4回書道の指導をしており、「生徒が筆を持って字を書くということだけでも意義があると思う」との教師のコメントが私たちの依頼したアンケート調査表に記入されていた。これらの科目は、移住者子弟の教育に日本語教師たちが意識して「日本の文化と伝統」を盛り込みたいとする努力と熱意の表れた科目であると言える。

これらの例にみられるように、日本語（国語）授業以外の科目の多くは、生徒の日本語学習への関心を高めるとともに日系人意識の形成および日本の文化と伝統へ目を向けさせようとする日本語教師たちの努力で実施されている。日本語が単なる一つの言語として教えられているのではなく、日系人が受け継ぐべき文化の総体として教えたいという日本語学校の教師たちの姿勢を、ここに私たちは感じる事が出来る。

この他に、イグアス日本語学校とオキナワ第1日ボ校の2つの学校が算数と数学を日本語で教えていることに、私たちは強い関心を持った。イグアス移住地で長年日本語教育に従事してきた佐藤邦夫校長の指摘によると、「日本人の子弟は数学に強い」という定説は過去のものになりつつあるという。この学校では教育水準の低い現地の正規学校の不十分な教育を補い、また子供たちに自信を持たせるために、算数と数学の主任教師を置いていた。数学などで同じ内容を日本語とスペイン語で重複して習うことはいたずらに子供を混乱させるものではないかと、筆者（国本）はかつて行ったサンファン移住地の調査で考えたことがあった。例えば、算数の「九九」を日本語とスペイン語で2度習うことが、子供にどのような影響を与えるのだろうかという問題である。結論からいうと、子供にとって特別混乱をきたすものではなく、むしろ多くの子供にとっては有

利になるようだ。スペイン語で「九九」を覚えるには、*Dos por dos son cuatro* ( $2 \times 2 = 4$ )... *Dos por seis son doce* ( $2 \times 6 = 12$ )... というような暗記の仕方をするため、日本語の「九九」より時間がかかる。したがって、日本語の「九九」で計算すると早く出来ることになるが、この点を子供たちも体験的に認識している。また、同じ内容を2度習うために一度では理解できなかったことを復習する意味でも、とても役に立ったという体験を語ってくれた二世もいた。

以上のような授業科目のほかに、学校の年間行事として日本における学校行事にはほぼ準じるものをどの学校も行う努力をしている。だいたいどの学校でも、入学式、遠足、運動会、学習発表会、修学旅行、お話し大会などを行っており、日本語教育は単なる日本語を言語として学ぶというだけでなく、日系人子弟にとって日本的な価値観と日本の文化と伝統を、断片的ではあるが学ぶ機会となっている。

日本語教育の教材については、ほとんどの学校が光村図書の国語教科書を教科書として使用している。しかし、少数ではあるが、その他の補助教材を使用しているところもあった。例えば、サンファン学園では読解、表現、文字という3つの分野に日本語教育指導を分け、それぞれに合った教科書やドリルを使用していた。サンファン学園では少数だが日系人子弟と一緒に学ぶボリヴィア人生徒のための特別クラスがあり、このクラスではブラジルの日本語普及センターが作成した『日本語で話しましょう』や「動詞カード」などが利用されている。

日系社会の日本語教育の共通した目標は、日本の国語教科書の小学校6年生レベルを中学校を卒業するまでに修了することに置かれている。しかし、その目標を達成するのはなかなか難しいと、現場の教師たちは私たちに語った。しかし、出来るだけ教科書の順序にそって授業を進めていき、内容があまりにも日本的で日本の国内でしか通じないようなものは飛ばしていくという。日本とは自然環境も習慣も異なるパラグアイやボリヴィアにおいて、日本の子供たちを対象に作られた教科書の内容に沿って日系社会の子供たちに日本語を教えることの難しさには、私たちが想像する以上のものがある。現場の教師のほとんどが一世であり、日本を体験的に知っている過渡期である現在ですらこのような問題が出てきているのであるから、二世が日本語教師となり三世や四世あるいは非日系人が日本語を学ぶようになる近い将来においては、使用する教科書の内容を現地にあったものにする必要が必ず出でくる。これは決して、遠い将来のことではない。アルゼンティンの日亜学院が子供の興味と関心にそった内容と日常的に使われている表現を取り入れた自前の教科書『にほんごひろば』を作成したのは、こうした要請に応じた一例であり(注5)、今後各移住地で、また、移住地相互が助け合って、自前の教科書をつくる必要性が高まるであろう。

日本語教育の一環として多くの日本語学校で作文が取り入れられており、作文集が編まれている。これらの作文集を読むと、日本語学校の教師たちが日本語教育にかけている熱意とそれに取り組むために払っている苦心が手にとるように分かる。子供たちも、総じてその熱意に応える

---

(注5) 関口 伸治『にほんごひろば』(フエノスアイレス:日亜学院1990年4月)

べく頑張っている様子が各頁から伝ってくる。近年に編集された作文集のいくつかは、ワープロで仕上げられているが、つい最近までのものは手書きのガリ版刷りであった。今回の私たちの訪問の折にわかったことは、だいたいの日本語学校にもワープロがあるか、学校になくとも教師の誰かが個人的に所有していてそれが活用されていることである。イグアス日本語学校の先生方との懇談の席で、もっとワープロの台数があり生徒たちが自由に使用できるようになれば、日本語習得への強いインセンティブになるのではないかという意見が出されたが、作文集を生徒たち自らが企画して作成することは、単なる日本語教育に利するだけでなく重要な教育効果があるように思われた。

#### 1-4 日本語教育現場が抱える諸問題

以上でさまざまな問題に触れてきたので、ここでは日本語教育の現場が現在抱えている問題を、その重要度の順に従って挙げていきたい。

##### 1-4-1 教師不足の問題について

どの日本語学校でも日本語教師の補充の問題が深刻化している。現役の教師の少なからぬものたちが日本への出稼ぎのため教師をやめていったという。そのあとを埋めているのは、主として時間に余裕のある中年の家庭の主婦たちである。日本語が話せてなんとか時間のやりくりが出来るというだけでかり出された新米教師にとっては、日系社会における日本語継承の責務を果たすべき立場にある日本語教師の任務は大きすぎよう。これは偏に、教師を長年ボランティア的な地位に留めてきた日系社会全体が負うべき責任であり、今そのつけが回ってきたとも言える。

さしあたって、日本語教師まで出稼ぎのため日本へ出てしまうという現象に歯止めをかけることは困難である。したがって、その後を埋める「にわか教師」に研修の機会を与え日本語教師に促成する方策を考えることが第1の緊急課題である。そして日系子弟たちの中から優れたバイリンガル教師を育てる努力を早急にやることである。これは不十分なレベルではあろうが、3~4年の努力で成果の出る課題である。現実的には優秀な女子中学生の中から人材を選び、教師を育成していく努力を日系社会全体の仕事としてやるべきであろう。これは男子が教員に不適格であるというのではなく、移住地日系社会の体質と現地社会の趨勢から考えると、小・中学校の教員に女子がなるというのは現段階では最も現実的であるからである。

##### 1-4-2 適切な教材の不足について

これまでは日本における国語教科書を使用することによって、日本語教育が行われてきた。そして、それなりの効果を上げてきたが、家庭内言語が日本語とは限らない子供たちが増えている現在、近い将来には外国語としてあるいは継承語として教え易い日本語教科書が必要となつてこよう。すでにブラジルでは編纂されているが、スペイン語諸国の日系社会でも使えるような日本語教科書が低価格で入手出来るようになることが望ましい。アルゼンティンでその試みが実現しはじめていることは先に指摘した通りである。一国の日系社会内部の努力だけで出来る作業で

はないから、JICAや国際交流基金の指導の下でこの日亜学院の先駆的作業をさらに拡大していくのも一案であろう。

#### 1-4-3 親の日本語教育に対する協力と努力不足について

私たちが訪問したどの学校でも、日本語学校の運営関係者と教師たちの日本語教育に対する熱意には強く打たれるものがあった。これらの人々との懇談から総合的に判断すると、日系社会の父兄たちは一般に言われている程、また今回のアンケート調査結果で示されている程には子供たちの日本語教育に対して学校へ協力するという姿勢は持っていないようである。まず、共通している第1の問題点は、日本語教育にはお金がかかるということに理解がないということである。特に都市部で指摘されたことであるが、英語の塾に通わせるのに高い授業料は出すが日本語学校へ出すことは渋るという。

日本語教師の給料は現地の物価と比較してもかなり低い。その教師謝金の補助を日本政府（JICA）に当然のこととして期待している傾向もみられるようだ。また、先に家庭においても日本語教育に努めているという比較的良好なアンケート調査の結果を紹介したが、実際には家庭の日常生活の中で子供の日本語教育を心掛けている家庭は極めて少ないはずである。だからこそ、両親が日本人である二世ですらその日本語能力に問題があるという現実が厳然としてあるわけであろう。日本語能力が非常に高い二世の子供時代の経験談から判断すると、家庭内での日本語の使い方に相当厳しく注意されながら育ってきていることがわかる。さらに付け加えるなら、日本語教育だけの問題ではないが、子供の教育を狭い視野でしか捉えられない親たちがいることに問題を感じた。この点に関しては、後に指摘する日系子弟の高等教育の問題のところで詳しく述べたい。

#### 1-4-4 日本語を学ぶ動機づけの不足について

日本語を学ぶことの重要性を子供たちになかなか理解させられない、したがって自主的な勉強意欲を子供たちが持てないということが幾つかの懇談の席で指摘された。しかし、子供たちの書いた作文を読んでいると、少なからぬ子供たちがはじめ「なぜ日本語を学ばねばならないのか」という疑問を抱き、親との対話や自分の周辺の観察からやがて「日系人として日本語を学ぶ必要がある」ことを理解するに至るようだ。また現在出稼ぎ目的で多くの日系人が日本へ出て来ていることは、現地の日系子弟にとって日本語の勉強に具体的な動機づけを与えている。

この事情とは別に、留学や研修の機会がもっと現実に身近にあることが望ましいという指摘がいくつかの懇談の席でなされた。また、地域社会の中に日本を身近に感じることの出来る文化センター的な施設の必要なことも指摘されたが、実際には地域社会でなくてもせめて首都なり大都会（ここではアスンシオンとサンタクルスおよびラパス）に、米国のアメリカ文化センターのような日本文化センターがほしいという意見が出された。そこでは日系人ばかりでなく、日本に関心のある人々が出かけて行き日本について知ることができ、さまざまな日本に関する情報を得ることもでき、同時に日本語を勉強してみたいくなるような雰囲気センターが望まれている。



## 2. パラグァイ及びボリヴィア移住地子弟のおかれた日・西2言語併用生活 — 2言語併用教育の現状と展望 —

### 2-1 日・西2言語による教育の問題点と利点

#### 2-1-1 バイリンガリズムの問題点と利点

子供たちが2つの言語を学習することは、パラグァイとボリヴィアの移住地に限られた現象ではなく、世界各地で古くから行われてきたことである。子供が2つの言語を使って生活することが、さらには2言語を通じて教育を受けることが（この2言語による生活と教育のそれぞれを、また、双方を意味する言葉としてバイリンガリズムという用語が使われる）、子供の学力、知力、また人格形成にどう影響するかは、今日、アメリカ、カナダ、イギリスを中心に研究が進められている(注6)。

学校教育をとりまく環境が比較的恵まれた状態にあるこれらの国々の場合と、パラグァイ及びボリヴィアのように公教育の水準が低く、移住者集団の言語維持はすべてその集団の責任と費用で行う場合とでは、必ずしも同一に論ずることはできないのだが、数多くの研究が指摘することの中で、次の項以後の諸点は、パラグァイとボリヴィアの場合にも活かし得ることのように思われる。

#### 2-1-2 バイリンガリズムと知的発達

かつて言われたバイリンガリズムの否定的側面（物真似は上手だが独創性や深い思慮に欠ける生徒をつくり出す、あるいは情緒不安定で著しく内向的か著しく攻撃的な性格をつくり出す、等々）は、今日ほとんど根拠がないものとして論駁されている。少数民族集団成員の一部が、もし、いわれるような否定的側面を持つことがあるとすれば、それはバイリンガリズムのためではなく、その集団のおかれた社会的環境とそれへの適応の過程で生れたものである。むしろ、バイリンガリズムは子供の知的発展に肯定的に働くことが多い。

2言語併用の生活をしている子供たちは、一般的な知的発達、言葉の意味の分析能力、さらに独創的な思考能力においても、1言語生活の子供たちよりも優れていることの多くの事例が報告されている。多くの移住地子弟が家庭内で日本語を使用し、家庭の外や学校でスペイン語を使用する状況自体は、子供の知的発達を妨げるものではなく、むしろ、多くの点でそれを促進すると考えてよいであろう。

---

(注6) その成果として、例えば、Jim Cummins, *Bilingualism and Special Education : Issues in Assessment and Pedagogy* (Clevedon, England : Multilingual Matters Ltd., 1984) がすぐれている。

### 2-1-3 2言語併用者のドロップアウトの問題

しかし、2言語併用の環境におかれた生徒の中で、2言語のいずれにも不十分な理解と表現しかできず、その結果、学習困難に陥り、学校からドロップアウトが起き、学力が未発達に終る場合が多くあることも、前述のアメリカなどでの研究で報じられている。

これは北米の場合であるが、学習困難やドロップアウトが最も陥りやすいのは、圧倒的な多数社会の圧力の下、学校言語（第2言語）に著しく価値をおくような社会環境の下で、生徒が第1言語（家庭内言語）に恥じらいを感じ、一方では第2言語に心理的反発を感じてそれを学ぶ意欲を減退させ、結局、両語ともいい加減になってしまう場合である。その意味で移住先の社会の中で、移住者が祖先から継承した言語や文化にどの程度誇りを保ち得るかは学習困難を未然に防ぐための一つの重要な条件である。

パラグアイやボリビアの場合、その国の言語や文化が移住者に及ぼす支配的な圧力はアメリカの場合などに比べて小さく、移住者の言語や文化が社会や学校で許容されている度合は大きい。そのため、移住者子弟が移住先の国語であるスペイン語に心理的反発を抱くことは少ない。一方では近年の日本の国力の高まりが日本語の地位を高めたこともあって、今日の移住者子弟は日本語に関して自尊心を持っている。〔2-2〕でみるように、移住者子弟の多くは一定年齢に達したあと、日・西両語をともに積極的に肯定する傾向が強い。次の文章はパラグアイ・イグアス移住地の16歳（高1）の女子生徒が書いたものであるが、日・西両語にどのように接し、どのように感じているかをよく伝えていると思われるので、少し長くなるが引用してみたい。

「小学校に入るまで私の家では、すべて日本語だけで話すようにいわれてきました。だからスペイン語小学校で初めてスペイン語を習い始めた頃大変難しく感じられました。ふだん家でスペイン語を使おうとすると、いつも父にどなられていました。 . . .

（中略） . . . いつも父にきびしく注意されてきましたが、日本語を学んできて本当に良かったと思います。それと私自身の一番うれしい事は、日本語しか話せない日本の祖父母に、私の思っている事を全部日本語の手紙でお話しが出来るという事です。

最近、母に『スペイン語をはっきり理解できるようになったのはいつ頃から。』と聞かれました。質問や試験、先生の言う事などは小学校の頃から理解できましたが、すぐにスペイン語で答える事ができるようになったのは中3に入ってからのような気がします。日本語を話す友達が多かったので日常会話では全然スペイン語を使いませんでした。まして妹や弟達と一緒に日本語の伝記、神話、世界文学、推理小説ばかり読んでいたのですからなおさらです。自分で（そろそろ日本語の本は卒業してスペイン語で書かれている世界文学などを読まなければいけない。）と書いてもなかなかできませんでした。でも、絶対に両親から授かった日本語と母国語であるスペイン語は、忘れません。2つの言葉を同時に覚えるということは、宝物が一つ増えたのと同じだと思います。」

（イグアス日本語学校『はばたき』1987年、55～56頁）

スペイン語を母国語と呼び、日本語を「両親から授かった言葉」と呼んでいるのが注目される。この生徒の場合、家庭で両親が日本語で話すことを徹底して貫き通し、それに日本語学校での学習効果が加わって、日本語を通して言語的な認識、分析思考力が発達し、小学校入学後、徐々にスペイン語の理解が高まり、高校1年になってスペイン語への違和感は全くなくなり、それを自由に扱えるようになり（スペイン語の理解、表現能力は従来経験からして、今後さらに発達することが期待できる）、日・西語ともほぼ完全なバイリンガルとなる最も理想的な例である。私たちが訪ねたいいくつかの移住地の生徒たちが、すべてこのようにうまくいっているわけではない。しかし、日・西両語の間におかれた子弟たちが、どうすればその双方を肯定し、双方を自分のものにできるかを示している例として注目してよいであろう。

アメリカなどで少数民族集団の中で起きる、前述のような第1言語への恥じらい、第2言語への反発が原因のドロップアウトは移住地では起こりにくい。移住地にもドロップアウトは存在するが、それは「はじめに」の項で述べた多様な要因が西語学校での学習の意欲を失わしめたためである。

パラグアイとボリビアの移住地出身者で35～40歳の中堅層の中で「教育の谷間世代」と自称する人たちがいる。日本で小学生か中学生になったばかりの年齢で両親と共に移住し、移住初期の生存第一の困難な状況の下でほとんど学校へ通わなかったか、通っても西語校は中学退学ないし小学中退、日語校も6年で終了という形でしか教育を受けられず、しかも、人にだまされぬためにもスペイン語を第一にして、日本語をおろそかにせざるを得なかった人たちである。その後も教育を受ける機会がなく、今日、日本語、スペイン語ともに不十分であると自ら語る人たちである。この人たちの場合、前述のドロップアウト、つまり、学校教育を強制されてその中で落伍したのではなく、むしろ教育の機会がなかったわけで、その分だけ受けた傷は小さく、心理的に萎縮することなく、今日、それぞれ、その職能を活かして社会的に安定した地歩を築いている。生活が安定し、日本との関係が拡大した今日、この「教育の谷間世代」は、日本語学習の必要性を強く感じ、その希望を自分たちの子供の世代に託そうとしている。

#### 2-1-4 第1言語を通じての言語的認識・分析思考力の発達とその後の学力向上

2言語併用生活者の学習困難の原因と解決法について、従来は2言語併用の子供は家庭内言語でしられる時間が多く、学校の言語で学び、考える時間が不十分なために学習の遅れが生ずる、そのため学習困難をなくすには、家庭内言語をすべて学校言語に子供を最大限にさらすことが解決法であると考えられていた。しかし、今日ではむしろ家庭内言語で子供の言語的認識・分析思考力をまず発達させ、その後で第2言語を学習する場合の方が、子供の第2言語能力の完全な発達に、また全般的な知的発達により結果を生むとの考えが強くなってきている。

ボリビア・サンファン移住地のサンファン学園の場合、幼稚園はほぼ日本語のみで、小学校1・2年は日本語を多く残しつつ、それにスペイン語を徐々に加えていくという行き方をとっているのは、第1言語を通じての言語的認識・分析思考力を発達させるには望ましい方法である。

これに対して、サンファン学園のポリヴィア人教師からまたパラグアイ・ピラポ移住地のパラグアイ人教師からも、「幼稚園がほとんど日本語であり、園児が日本語に依存し過ぎる、西語の少なくとも聞き取り能力をもっと鍛えるべきである、また小学校進学後、日本語による授業にさかれる時間が多く、それがスペイン語授業の時間を圧迫しスペイン語学力の発達を遅らせている」との危惧が私たちに表明された。

これに対して私たちはその場で私たちの考えをまとめることができなかったが、報告書作成の今の時点では、次のような返答ができる。現実に存在するスペイン語能力の不足を前にして、関係者の前述のような危惧はよく理解できるが、移住地での現行の学習順序と日・西語学習の時間配分は決して誤っているのではなく、長期的には生徒のスペイン語能力、一般的な知力を伸ばすものであると考える。前項で示したイグアス移住地の高1の女子生徒の例は、日本語を通じて言語的認識、分析思考力が育った場合、西語教育の中でも大きく学力が伸びることを雄弁に物語っている。私たちが訪ねた移住地のほとんどで、西語校の成績と日語学校の成績がはっきりと正の相関関係にあることも、そうした考えに根拠を与えるものである。日語学習が西語学習の時間を圧迫するために西語学力が低下しているとはいえないのであり、むしろ、西語学力低下は、日本語を通して言語的思考力を十分に育てなかったために起きることが多いと思われる。

#### 2-1-5 家庭内での日本語の重要性と正しい日本語の問題

北アメリカやイギリスでの前述の研究は、同じ移住地集団の子弟間で家庭内で民族語を使用する生徒の方が、学校でも家庭でも英語を使用する生徒よりも学力が高く、また、英語の理解、表現力でもすぐれる傾向があることを示している(注7)。カナダ・トロントの日本人移住者子弟の間で同様の傾向があることは中島和子氏の研究で示されている。ただし、他方で同氏は、日・英両語の2つのシステムの区別がはっきりできず、その結果学力が低下する子供の例にも言及し、日本語教育と一般的な学力の発達との関係については、わかりにくい面があり、一層の研究を必要とするとの立場をとっている(注8)。さらに英語読解力に関しては、移住者子弟で家庭において民族語を使用するものの方が、そこに生れ英語を母語とする生徒よりもすぐれている例が報告されている。

家庭内で親が自分にとって一番自信のある言葉で話しかけ、子供はそれを通して言語的思考力を養い、さらに学校(例えばバイリンガル校や移住地日語校)で第1言語を通じての教育を受けるならば、その言語的思考力や完成は高まり、その生徒が第2言語による教育に移った場合、最終的にその第2言語でも高い理解・表現力を身に付けることができる。こうしたわけで、日本人

---

(注7) *Ibid.*, pp.110-113.

(注8) 中島和子「日系子女の日本語教育」(『日本語教育』66号 1988年11月)、137-150頁。同「カナダ日系人間での日本語教育—継承語教育としての側面」(海外日系人協会『日本語教育の活性化についての報告書』1989年)、79-82頁。

移住者の親が、子供になるべくスペイン語に慣れさせようとして家庭内で無理して不完全なスペイン語を使うことがあるなら、それは、長い目で見れば、子供のスペイン語能力の発達を妨げることになる。

西語校の教師が、生徒にスペイン語に最大限の接触をするように家庭内でスペイン語で話すことを求めることがある（ピラポ移住地、中3女子生徒の証言）（注9）。しかし、家庭内で親子がスペイン語で話すよりは、親が自信のある日本語で、しかも、スペイン語の語彙をなるべく混えない質の高い日本語で話しかけ、子供の言葉に関する感性を高める方が、子供の将来にとって有益であると思われる。

〔1-1〕で述べたように、日本語教育を重視しながらも、それをすべて学校にまかせきりという家庭が移住地には多い。特にパラグアイのイグアス移住地とピラポ移住地でその傾向が強く、他方都市化により多くさらされている移住者の場合には、家庭での日本語教育を重視する傾向が強い。学校にまかせきりは、また、家庭内で正しい日本語を使う意識が低いことに通じる。表5で示されているように、家庭内で意識して正しい日本語を使おうとしている比率は、都市部および都市化の影響を強く感じているチャベス移住地では、普通の集団移住地の2倍に達する。

子供たちに正しい日本語を覚えさせたいとの意識や使命観は日本語学校の教師たちの間で最も強力である。ピラポ中央日本語学校の作文集『みのり』第14号（1989年）で永見悦子校長は巻頭の辞で、「これからは特に正しい日本語を、正しく学んでいくことが大変大事なことです。勉強の時間だけで正しい言葉を使うのではなく、お家で家族と話し合う時も、友達と遊ぶ時も正しい言葉を正しく話すように心がけないと、誰にでも聞いてもらえるきれいな日本語は身につかないのです」と、正しい日本語を学校だけでなく、家庭でも使うことを強調している。

スペイン語の語彙の混った、あるいはスペイン語的発想の日本語ではなく正調な日本語を維持していくことは、移住地の日本語教師にとって義務のようなものであり、その心情は深く理解できる。移住地での使用言語が圧倒的に日本語であったこれまでの状況下では、正しい日本語を強調することは肯定的な効果が大きかった。しかし、今後、言語使用にスペイン語が浸透してくると、日本語の誤りの過度の指摘や強制は子供の表現しようとする意欲をそぎ、萎縮させる可能性がある。したがって、子供が正しくない日本語で何を表現しようとしているかのメッセージを、まず汲み取った上で、それを正調な日本語に近づけていくというやり方が必要となってくる。萎縮させずして正しい日本語に近づける。これをいかに実現するかは、現場の教師にとっての大きな課題となるであろう。

#### 2-1-6 日・西両語学習の積極的意義と残された問題

以上、2言語併用生活および2言語併用教育が子供の知的発達に肯定的に働くことが多いことをみた。子供が家庭内で育った第1言語で学校教育を出発することが、子供の言語的な認識・分

---

（注9）ピラポ中央日本語小中学校『みのり』（第14号 1989年）、39頁。

析思考力を発達させ、それが長期的には第2言語の学習を、また、それを使った一般的な教育に利することを見た。

その大多数が家庭の中では日本語で育った移住地子弟にとって、日本語学習が維持されることは、さらには幼稚園を含めた学校教育の初期において日本語を通じての一般教科の学習が行われることは、のちにスペイン語能力を発達させるためにも、また、一般的知的能力を高めるためにも、望ましいことである。また、家庭内で日本語を使うことは、子供の言語的思考力や感性を発達させるために望ましいことである。

しかし、実際には次節で見るとく、移住地の各家庭の間で言語使用や教育観に関して多様化が進み、すべての子弟がここで望ましいとされた学習の型におさまらないことは明らかである。さらに、子弟の一部にすでに現実に存在している学力低下やドロップアウトにどのように対応するかという焦眉の問題には、前述の、最初日語に力を入れ、のちに西語を高めるという段階的な言語発達の方法は、もはや役に立たない。ドロップアウトした生徒は幼時から小年期までをもう一度くり返すわけにはいかないからである。

日・西語とも不十分だがある程度水準にある彼らドロップアウト生徒にどのような教育がなされればよいか、それとも一般教科中心の学校教育でなく、職業教育に徹する方が賢明なのか、しかし、それは可能なのか。これらの問いに、今日までのところ返答は出されていない。学校をドロップアウトした人たちは、個々に自分の運命を切り開くべく、社会で様々な経験を積んでいるのが現状である。

このようにドロップアウトした子弟への対応という緊急の問題があり、また移住地内で進む多様化への対応が必要であるが、基本的には移住地子弟の教育は、日・西両語を学習することの利点を踏まえ、今後も日・西両語を通じ、しかもそれを両語の学習時期の順序と力点をよく考えることにより、効率よく、高い質を保った形で進められることが必要である。

## 2-2 2言語・2文化をめぐる移住地の環境と反応

### 2-2-1 日・西2言語の使用状況とそれへの子弟の対応

戦後に建設された集団移住地での日本語維持率は全般に高く、子供たちの日本語能力も全般的に高い。移住地子弟の多くにとって日本語は周辺に充ちており、日本語を学ぶことを疑うことなく、ごく自然に受け入れる状態が存在しているといつてよい。その点、例えば、私たちがアルゼンティンのラプラタ日系学生寮で会った移住者子弟大学生の何人かのように、移住者が散在しているところ（小さな町に日本人家族が1つか2つしかない）で育った子弟の場合には、幼稚園入園時まで家庭で日本語を話していたのに、入園とともに西語を話すよう教師に強く指導され、日本語離れを起こし、その後は家庭内での両親との対話も西語となり、日本語を話す能力を失ってしまったような例は、これまでパラグアイとボリヴィアの戦後移住地では起こりにくかった。

ただし、これら集団移住地でも、西語校をはじめとする家庭外の世界での西語使用の影響が浸

透しは始めている。5年前、10年前に比して、家庭内での日本語使用率は低下しはじめており、子供たちは親とは日本語で話すが、兄弟や友達との会話は、日本語と西語を混ぜて、ないしは西語で話す傾向が入り込んできている。〔2-1-3〕でみたイグアス移住地の日・西バイリンガルの高1の女子生徒の例のように、家庭で親が子供たちに日本語使用を徹底させているところもあるが、今日ではそうでない例も増えてきている。

次に引用するのは、言語使用のそうした新しい傾向と若い子弟たちの日本語観を示す、ピラポ移住地の中2の男子生徒の作文の一部である。

「この世の中では、勉強をしなければ社会の中に出られないと言えるだろう。裕福に生きて行くためには勉強が必要である。今若者をはじめ世界の人々が日本語や英語や他の言葉を勉強する為に他国に留学して大学で勉強している。．．．（中略）．．．

もともと勉強の嫌いな僕は暗記ものなど全然だめで最初から勉強する気が起こらない。だが今までの考えを卒業しようと思い、これから先はスペイン語と日本語をまじめに勉強しようと思う。

近年日系パラグアイ人は、あまり日本語を使わない。なぜだろう。僕たち学生にしても日本語とスペイン語をまぜて話す。日本語を学習しているのに言葉が分らなくなってくるとスペイン語で話している。自分ではこの話し方は良くないと思っけていても、これを当然としている。僕は日系二世。

これからも日本語を大切に色々学んで、これらをもとにして将来良い仕事ができるばな一と思っけている。」

（ピラポ中央日本語小中学校『みのり』第14号 1989年、31頁）

日本語が経済的な成功と結びつけられておりその学習動機がはっきり示されていると同時に、友人間の会話での日・西両語の使用状況の一端を示している。

## 2-2-2 日本語学校生徒にとっての日本語 —— 混血、非日系生徒の増加と国語、外国語、継承語 ——

移住地子弟の作文をとりあげて日・西両語の使用状況の一端をみたが、実は日本語教育のことを考える場合に彼らを取り囲む言語使用の状況には、もう少し複雑な要素が入ってくる。それは移住者子弟の通う日語校クラスの中に、両親とも日本人か日系人で家庭でも幼稚園でもほぼ日本語で育ってきた大多数の生徒の他に、（1）家庭でまったく日本語を使用していないパラグアイ人やボリヴィア人の子弟、（2）両親の片方が日本人か日系人で他方がパラグアイ人やボリヴィア人の混血の生徒（その場合、家庭では日本語よりもスペイン語が主要言語であることが普通である）、（3）日本語をあまり使わない型の二世の家庭の子供たち、が加わってきていることである。

学校での日本語教育は、これら（1）、（2）、（3）の生徒たちのことを配慮しつつ行われねばならず、しかも、現状では少数派のこれらの生徒は今後その存在を大きくすると見られる。（3）

に関しては、はっきりした数字は出ないが、(1)と(2)に関しては表-8に見る通りである。集団移住地の日本語校の小学部では、(1)と(2)の型の生徒が全体の10~15%のところが多いが、それでもイグアス日本語小学校の場合は全生徒152人中、19人が混血、9人が非日系になっている。都市部の場合(1)と(2)の型の生徒の比率が高くなり、エステ市日本語校の場合は、幼稚園、小学校とも生徒の過半数が混血と非日系の生徒で占められている。

現状では、混血の生徒は受け入れるが、まったくの非日系の生徒は受け入れない日本語校もある。非日系生徒は多くの場合、年長であり、質問が多く、それが年少の日系生徒と同じクラスにいると、授業のペースが乱れるというのが、受け入れてこなかった理由である。しかし、現地人との摩擦を小さくするためにも、将来は非日系人をできるだけ受け入れたいとの意向は、それらの学校から示された。

このような多様な生徒たちを集めて行われる日本語教育は、ある生徒にとっては母語としての国語学習に近く、他の生徒にとっては外国語を学ぶに近く、別の生徒にとっては、母語ではなくなってきたが父祖から受け継いだ、また、つながりを感じさせる言葉(継承語)を学ぶことである。言語的背景がこのように多様化した生徒を、同じクラスの中でどのように教えるかは今日すでに大きな問題であるが、今後、それは一層大きくなろう。

移住地の日本語教師は国語としての日本語を教えてきた人がほとんどであり、外国語としての日本語教育専門家は皆無に近い。少数存在する二世のバイリンガル教師の中から外国語あるいは継承語としての日本語を教える専門家が生れる基盤はあるのだが、第1章で述べたごとく、二世の間で日本語教師になろうとする人が極めて少ないのが現状である。

### 2-2-3 移住者子弟による日本語学習利点の積極的肯定

戦後に建設された集団移住地の日本語維持率は低下してきているものの、都市化した日系人あるいは戦前移住日系人の子弟のそれに比すればはるかに高い。

そうした集団移住地の子供が日本語を話さなくなった他の日系人の子供に接した時、どのような反応を示すであろうか。次に引用するのは、パラグアイ・イグアス移住地(1985年の家庭内日本語使用率99%、1990年の調査では日本語だけという家庭が67.4%、それに主として日本語という24.4%を加えると、全体の91.8%が家庭内ではほとんど日本語のみの生活をしている)の14歳、中2の女子生徒が、ブラジル・クリチーバの純心学園の日系生徒たちの来訪を受けた時の印象記の一部である。

「私は前の列に座っている5人の女子の友達と仲良くなりました。ひょうきんで愉快な人たちですが、だれ一人として私たちのようには日本語を話せません。時々、片言だけで、あとは全部ポルトガル語で話すのです。私は変に感じながら、ポルトガル語で話してみると、もっと話しがはずんできました。

でも私は心で、『日本人の顔をしているのにどうして日本語が話せないんだろうかな、



ちょっと気の毒な人たちだ』と思いました。

確かに、私たちは日系人です。でも日系人だからといって、日本語を捨てるような事は絶対に間違っていると思います。何故かと言うと、私たちは日本人の顔をしていますし、また、『日本』という私たちの心のふるさとがあります。いつかきっと私たちが日本に行く時が来ます。その時のために今から日本語を勉強していたら、どんなに役にたってくれるでしょう。私はその日を楽しみにしながら勉強します。

クリチバはすごく栄えている町で、日系人はほとんどポルトガル語だけを話すから、仕方がないのだと思いました。でも、なんだか納得しない気持ちでいました。

(イグアス日本語学校『はばたき』第3号、1988年度優秀作文集、88頁)

この作文には親や日語校教師からの影響が感じられるが、日本語を学習し継承することへの強い肯定感と日本語を失ってしまった日系人への違和感が表されている。この反応は、集団移住地の多くの子供たちに共通するものと見てよいであろう。

移住地子弟は自分たちが日本語を話す利点を明らかに意識しているようである。日本語学習に価値を見出す傾向は、日本の繁栄、パラグアイ人やボリヴィア人の中からも日本語を学ぶものが出てきていること、身近になった出稼ぎないし日本への研修などに刺激されて、子弟たちの間で強まってきている。これまでに引用したいくつかの作文で見ると、よい仕事を得るに有利だとする実利的なもの、親や祖父母とのつながりを大切にする感情的なもの、日本文化継承の意識など、動機と力点は個人によってかなり違っているが、いずれも日本語学習に高い価値を見出している。

もちろん、日本語の価値を無限大と信じているわけではない。その効用の限界を感じる子弟もあるが、その場合でも、なお、自分にとってはとどめておくべき言葉との意識がある。家庭内で日本語、それ以外はほとんどスペイン語の生活という、ピラポ移住地の中3の女子生徒は、日本語は「限られた人たちしか使えない悲しい面があるのです」としながらも、「スペイン語で『愛している』といわれるより、日本語でいわれたほうが相手が真剣になっているような気がする」といい、自分の中に内在する日本語とのつながりを感じ取り、毎週土曜日の日本語学校は中学生活の中での一番の楽しみであったと述懐している(注10)。

移住地における子供たちの日本語と日本語学習に対する反応は、今日、おおむね肯定的である。親たちの、また、各移住地の指導者たちの日本語教育に対する熱意も、〔1-1〕でみたように、10年前、あるいは5年前に比しても、はるかに高まってきている。ボリヴィアのオキナワ移住地のように、かつてボリヴィア社会への同化の度合いが強く日本語能力が低下していたところでも、今や、日本語教育を著しく重視するようになってきている。

---

(注10) ピラポ中央日本語小中学校『みもり』(第14号 1989年)、38-39頁。

#### 2-2-4 スペイン語教育への親の熱意と子弟の西語能力不足への憂慮

かつて移住地には、移住先国の言葉であるスペイン語さえやれば十分で、日本語を教える必要はないとの意見もあった。(私たちが各移住地で持った会合でもそのことを述懐する年配の移住者も多かった。) 今日、そうした意見は、日本語教育熱を前にして聞かれることは稀になった。しかし、日本語重視の傾向が強まっても、各移住地指導者や生徒の親たちがスペイン語による授業を重視することには変わりはない。「西語授業を重視し、日本語はそれとの関連の中で教えていく」ことは、実際には午前西語、午後日本語という2課程のバイリンガル教育を行っているオキナワ第1日ボ学校でさえいわれていることである。

西語重視の姿勢は、さらに、日本語教育に力点と時間がかかりすぎ、その結果、西語教育がおろそかになっているのではないかとの危惧を生む。例えば、イグアス日本人会は次のような憂慮を示している。

「日系社会の真の発展を考えると、ブラジル国の様に、優秀な人材が当国政界、官界、財界に多く輩出せねばならないが、その為には公用語であるスペイン語、ガラニー語を充分に駆使出来るものを養成せねばならない。然しながら、日系移住地という日本語のみで生活の可能な社会に住んでいる為、どうしても日常語としての日本語を使用し、そして日本語教育を重視する事に依り、スペイン語の理解力・表現力の低下が心配される(現状、一部でスペイン語理解力不足を問題としている)。今後、日本語教育とスペイン語教育のバランスが憂慮される。」

(イグアス日本人会『概況』1989年10月、9頁)

たしかに一般に、中学3年あたりまでの移住地子弟の西語能力は不足しており、「子供たちがスペイン語をおぼえ切れぬ、移住地にいる限り、その状態が続く」との憂慮も示されている。しかし、子弟が高校に進学したあとは、西語への違和感はなくなり、西語授業が楽しくなり、西語能力の遅れはとりもどせる例も多い。

私たちが面接した各移住地出身の高校生と西語課程の教師は、高校入学時に移住地子弟たちの西語学力が不足しているものの、勉強に集中すれば、その後1年でその遅れはとり戻せるとの証言を行っている。努力と適性と友人の協力があれば、中学校卒業後約半年で追いつくと証言もある。

子供たちが小・中学期に日本語を通じて言語的な思考力を十分に養っていた場合、高校に入るとほぼ全時間をスペイン語授業に集中するようになると、西語の理解と表現力は急速に伸びることが多い。むしろ、問題は小・中学期に日・西両語ともいいかげんな学習しか行われず、そのため、言語的な思考力が不十分にしか発達していない場合で、この場合には高校に入っても西語能力が伸びず、学習困難に陥ることが多い。日本語教育に費やす時間が大きいと、その分だけ西語能力の発達が抑えられるというのではなく、むしろ、長期的には、きちっとした日本語学習が

西語能力を伸長することが多いことを知ってほしい。小・中学時代の西語校の教育の質が低い場合には、なおさら、日語教育で言語的な思考力を養っておくことが大切である。

#### 2-2-5 西語教育への子供たちの反応 —— 日・西両語の肯定 ——

親たちの西語教育観と子弟の西語能力不足に関する憂慮の問題をみたが、子供たちはスペイン語をどのように見ているのであろうか。日本語を学ぶことを積極的に肯定している子供たちのほとんどすべてが自分はパラグアイ人だから、あるいはボリヴィア人だからスペイン語に秀でなくてはならない。そのことを通じて、パラグアイの人たちないしはボリヴィアの人たちとの友情の輪をひろげたいとの心情を吐露している。日・西両語を同時に肯定し、それを両立させたいとの気持ちが強いことは、これまで挙げた作文の諸例のほとんどが示すところである。それは親や教師が望んでいることを優等生的にその通りに言っているのとは違った、子供たちの率直な心情のように思われる。西語校の高校に入学を拒まれたり、入っても中退した子弟たちが西語学習をどう考えているかの資料は乏しいが、私たちが日本で会った少数のそうした子弟たちは、スペイン語への反発や否定的感情を持ち合わせていなかった。

もちろん、スペイン語への違和感はいわゆる子弟が経験するようであり、特に年少の時にそれは強い。小学校時代、子供たちは日語校と西語校のどちらが面白いかと問いに異口同音に日語校と答えるが、この段階では西語教育（それは西語だけでなく西語教師、クラスの中の生徒らが象徴する総体なのだが）への違和感があることを示している。しかし、違和感ではあっても、それが反発や否定感情に発展することは少ない。西語が、また西語教育が強制されたものとの感覚を子弟たちが持つことも少ない。西語との接触が急にではなく長時間をかけて徐々に増大していくこと、また、家庭にもどれば日本語があるという安心感が西語による圧迫感をなくしている。

子供たちが、周りが日系人が多い小学校から非日系人が多いスペイン語が中心になる中学校に進学した時に（パラグアイの場合）、あるいは日系人が主だった中学から非日系人が主となる高校へ進学した時に（ボリヴィアの場合）、自分の西語能力が不足していることを感じるが、やがてその能力が高まるとともに西語への違和感は消え、それを使って話したり、冗談をいうことを楽しむようになる。こうして、日・西両語が積極的に肯定されるようになる。この2言語の肯定感、子供たちがバイリンガルへと成長するのに不可欠な条件である。

#### 2-2-6 西語校の質の低さの問題

子供たちの中にはほぼ完全なバイリンガルに育つものがある一方で、子供たちが小・中学期に受けた西語教育の質の低さが高校進学後も影響して、西語能力が不十分なままで終るものがあることを指摘する声も強い。私たちと懇談したパラグアイ・ピラボ移住地のタナカ医師（コルメナ出身二世）は、パラグアイにおける医学部への進学率で日系人が韓国人や中国人に劣るのは、日系人が受けてきた西語教育の水準の低いことに最大の原因があると指摘した。たしかに、小・中学期の西語教育が充実していれば、子供たちの西語能力の開花が高校ではなくもっと早くはじまることが可能であり、高校での西語能力および一般的学力の伸びが、より急速に、より完全なも

のになり得る。

移住地西語校の質の低さに関する苦情は、ほとんどの移住地でかかれた。設備の貧しさや無規律、現地人生徒の学力の低さも深刻であるが、さらに深刻な問題は教師の質の低さである。サンファンとオキナワ第1の両移住地では、3年前から日本人会自らが私立校を設立し、その運営を行うことで、教師を選ぶことができるようになり、ようやくその質を確保できるようになった。公立校の場合にはそうはいかない。知識、能力、熱意に劣る教師も、そのままとどめなくてはならない。算数などの教科内容で間違っただけを教えながらそれに気づかないでいる教師もいる。

一方には熱意と愛情のある教師もいるが、他方には人格、倫理面でも疑問視されるものがおり、「日本人は復讐が怖くて、ものが盗めない」といった言辞をはく教師がいる。こうした教師の下では、学内の規律を保つことは難しいであろう。

パラグアイおよびボリビアとも、教師の給与は低く、特に公立学校でそうであり、優れた人材が教師、特に公立学校の教師になりたがらない。一校で働きつつ、他校でも教えて収入を補うのが多くの教師の状態であり、そのことが難しくなる農村部の学校に良い教師を招くことは至難のわざである。こうした状況が容易に変わらない以上、移住地西語校に良い教師をそろえるには、給与補助が必要であり、西語教師給与へのJICAからの補助金は今後も維持される必要がある。

質の良い教師の確保とともに、日語校の校長や教師が西語校の教師と話し合う機会をもっと多くし、教授法をも改善しないと、西語校の現状は変わらない。子弟が西語教育の初期から水準の高い教師による、また子供たちが2言語併用生活者であることの利点を理解できる教師による、質の高い教育を受けることが、何としても必要である。移住地西語校の質の改善は今後の大きな課題として残されている。

#### 2-2-7 現地価値観との接触と2文化間でのアイデンティティ

移住者の多くが、日本語教育がなぜ必要かの理由に、日本語教育を通じて幼少の頃に子供たちに日本的価値を植え付けることと、日本的なものの考え方や行動様式を育むことを挙げている。日本的価値の中で特に強調されるのは、勤勉、我慢強さ、遠慮深さ、計画性、規律、正直である。その意味で、幼稚園は極めて重要であり、また、小学校進学後も日系人を主とした私立校がないところでは、土曜1日を子供たちが日語校で過ごす中で、読書癖や組織内での行動を身につけさせることが重要とされている。

こうして日本的な考え方で育まれる子弟も、現地人との様々な人間関係が生ずるにつれて現地的な考え方を知ることになるが、それを受け入れる度合は、移住地によっても個人によっても相当異なっている。教育に対する態度も相当な開きがある。

かつて日本人移住者の間で顕著で、今日ではパラグアイおよびボリビアの韓国人と中国人の間で強い傾向となっている「学ぶことそのものを徳」とする儒教的考え方や人生における成功を重視し、教育をそのための重要な手段と考える傾向は、今日の移住地にも認められる。そうした親からの期待に応じて、子供たちは、まず学校で好成績をおさめようと努力し、競争に敗れるこ

とは恥であるとする考え、疑うことなしに学習に没頭していくというメカニズムの存在は、もちろん、今日の移住地でも見出される。しかし、この傾向も、現地的考え方との接触で、生徒によっては変容をみせている。

教育に関して、パラグアイやボリビアの庶民の間では、子供たちは家庭内で仕事の役割を与えられ、勉学よりもその方が大切であり、さらに、自分が好きでなく何に役立つかがはっきりしないことに自己を犠牲にしてまで励むことはなく、苦しいことはできるだけ避けるといった考え方が強い。また、親は子供たちが学校で幸福であることは望むが、その中で競争にうち勝つことには価値をおいていない。

移住地の指導者や日本語教師は、子供たちが苦しいことに耐え抜く意志を持ち、規律を身につけ、かつ思い遣りの心を持つ人間に育てたいとの希望をもって、教育に臨んでいる。現地人との接触を一定限度に抑えた日系人中心の私立校の設立は、そうした目的にかなうものである。しかし、それでも浸透してくる外からの異なった価値観にいかに対応するかは今後の大きな問題である。

パラグアイやボリビアの社会を支配する価値観は、たしかに、規律、競争、成功に向かっていないのだが、それでいて、そのゆとり、人間性、普遍性は移住者子弟をひきつけるものがある。次に引用するのは、イグアス移住地の小学校を終えたあと、パラグアイ人がほとんどの中学に通っている中学2年の女子生徒（14歳）の文章である。

「エスピトゥ・サントには 2,000人以上の生徒がいて、日本人はわずか13人です。私は、この学校に通い始めてまだ2年。．．．（中略）．．．私がこの学校に入る前、母が『エスピトゥ・サントの学校に入ったら、日本語学校の友達とスペイン語学校の事を話し合ったり出来ないし、会う時間も少ないから、あまり気が合わなくなるわよ。』と言ってくれたのを覚えています。確かに、それは本当の事です。エスピトゥ・サントに通い出してから、何だか日本語学校の友達が速くに行ってしまうような気がしました。でも、もし、この学校に通っていなかったら、今のような友達は出来ていなかったと思います。

また、どちらかと言うと私は、パラグアイ人の中で生活する方が好きです。私は気が弱い方ですから、けんかになるのがこわい時は、自分の思っていることがはっきりと言えません。でも、パラグアイ人と生活するなら、自分の思っていることをちゃんと言えないと、いい生活なんて送れません。パラグアイ人のそういうところが好きです。

私は、パラグアイ人の中で生活して、色々な事を学びました。パラグアイ人には悪いところもあるけれど、いいところも沢山あります。以前は、信用できませんでしたが、今はだいぶ信用できるようになりました。いつもパラグアイ人の友達に相談に乗ってもらいます。そしたら、真剣に考えてくれます。今まで、これほど真剣に考えてくれる友達はいませんでした。．．．（中略）

私は、これからもパラグアイ人の友達をもっと増やして、パラグアイ人のいい所を見つけないかと思っています。そして、日本人のいい所も忘れないようにして、中学生活のいい思い出がたくさん出来るように、がんばりたいです。」

(イグアス日本語学校『はばたき』第4号、1989年度優秀作文集、68-69頁)

子供たちは彼らの接する2つの文化をできるだけ理解し、両者からよい面をとり入れたいと考える。しかし、言語に関してバイリンガルになるようには、文化に関してバイカルチュラルというわけにはいかない。2つの異なった価値基準を理解しても同一の人間がその両方を持つことはできないからである。また、価値観は一つのセットになっていて、パラグアイ的人間性と日本的規律といった双方のいい面だけをとり出して受け継ぐわけには、なかなかいかないからである。子供たちはパラグアイ人のよい面の影響を受けるならば、悪い面というか、規律や競争に否定的な面の影響をもどうしても受けざるを得ない。

#### 2-2-8 教育熱と教育への親のかかわり方

日本人は教育熱心といわれ、かつてラテンアメリカでも北米でも日本人移住者は子弟に高い教育を受けさせ、技能と資格を身につけさせることで経済的、社会的地位の向上を獲得しようとし、それに成功した。パラグアイとボリヴィアに戦後建設された集団移住地の場合も、入植とともに学校を開き、その後も日本語学校を維持し、また西語校の質をなんとか向上させようと大きな努力を払ってきた。しかし、学校をつくることに、また、その運営主体のあり方に強い関心を示す移住者も、それが出来上ってしまうと、学校に教育をまかせ切りにし、子供が学校で学んでいることに、また、学校で子供がどんな状態におかれているかに関心を示す親は少ない。

移住地では全般に、子供に親が本を読んでやったり、学校で起きていることについて親子で話し合ったりする家が少ないとの印象を私たちは受けた。また、都市部の高校に子供が進学した場合、その子が都市でどんな生活をしているかにも、親は関心が薄い。サンファン移住地のサンファン学園で、ボリヴィア人教師の苦言の一つは、日本人父母が学校に来て教師と話をする機会がほとんどないことであった。

子供が学校で学んだことを家に帰ってから親に話して聞かせるという経験の有無、つまり、親と子供が学習を共有しているという気持の有無は、子供の学習の進歩に大きく関係するといわれる。それは仮に親が移住先国の言葉がよくわからない場合でも子供が読み上げるのを聞いてやるだけで、子供の学習意欲は高まる。

私たちが会った移住地指導者や教師の多くが、家庭教育の重要性を強調した。それが強調されるのは、現実にそれが実践されていない家庭が多いことを意味する。教育にとって家庭が重要なのは、そこで親が子供に何かを教えるということだけではなく(日本語継承のためにはそれが重要だが)、学校で、また、外の世界で子供が学んでいることに親が関心を示すことが同等に重要なのである。

一方では教育熱そのものも、かなりの親からは失われてきているといわれる。富裕化が教育熱を弱めているともいわれる。パラグアイやボリヴィアの農村社会の中で、移住者は農業経営者パトロンとして経済的地歩を築き、その中には経済的成功をおさめた人も少なからずいるわけだが、その結果が移住者の多くの間に、経済的成功は教育と無関係にもたらされるとの信念を強めている感がある。経済的成功や社会的上昇が、高い教育よりは、むしろ、知恵、運、度胸、人脈と処世術によってもたらされることが多く、大学を出ても職が得られないことが多いパラグアイやボリヴィアの社会の中で、この信念は、たしかに説得力がある。

しかし、パラグアイやボリヴィアの社会も変化していき、移住地をめぐる環境も変化していく。パラグアイでは、かつては小学3年までで子供を学校から退学させたが、今は6年まで続けるようになってきたし、各国からの移住者の影響とパラグアイ自体の社会変化の影響で、パラグアイ人はかつてより教育への関心を示し、また、計画性を持つようになってきている。ボリヴィアでも一般人の教育への関心は高まってきている。そうした中で、移住者の子弟たちが、一定の水準以上の質の高い教育を受けておくことは、彼ら自身の将来のためにも、また、日系社会の将来のためにも必要なことと思われる。

## 2-3 移住地の内外における2言語教育の現状

### 2-3-1 移住地内での2言語教育

前章でみたように、移住地子弟は多かれ少なかれ2言語併用の生活を行う環境におかれている。その多くは、幼時、家庭内では日語で育ち、幼稚園も日語が主であるが、ここで西語との接触が始まり、小学校は西語による教育を受ける一方で日語学習を行い、中学に進むと学習、会話ともに西語の量が増加し、高校になると（ほとんどの場合、移住地の外で生活することになるが）日語学習はなくなり、触れる言語は西語が主になる。

こうした過程の中から、2言語学習がもっともうまくいった場合には、ほぼ完全な日・西バイリンガルに成長するが、他方では、どちらかの言語に偏る例、あるいは2言語とも表現力が不十分な例も出てくる。

文化や価値観の場合、言語と違って、2つの異なった考え方をともに自分のものにして、自分の価値判断基準とすることは不可能だが、〔2-2-7〕でみた中2の女子生徒のように2つの文化をできるだけ肯定的にとらえようとし、理解を示そうとする例は見出される。

2つの言語、文化の間に立たされる子供たちが、それぞれをどれだけ自分のものにする、あるいは自分に近づけるかは、個々の例で相当に異なっているが、各移住地での学校教育は、どの状況の子供たちにも2言語学習の機会を与えている。

移住地子弟への2言語教育の形態はさまざまであるが、少なくとも次の3つの類型が存在する。

#### (1) 西語学校と日語学校がまったく分離している型

パラグアイの移住地あるいはパラグアイおよびボリヴィア両国での都市部の日系人の子弟教育

がこの型である。子供たちは通常、公立西語校に通い、土曜日に、あるいは放課後週3日、さらに長期休暇期間に日語校に通うというものである。日語授業は年間169-350時間とやや開きがあるが(表-8参照)、移住地での日語学力は高い。ボリヴィアの移住地でも次の(2)と(3)に組み込まれていない少数の移住地子弟は、この型の教育を受けている。

(2) 同一学校の中に西語・日語2つの課程が存在し、移住者子弟が両課程で学ぶ型

ボリヴィアのオキナワ第1日ボ校(Colegio Particular Mixto Centro Boliviano Japonés Okinawa I:小学校5年間および中学校3年間)、オキナワ第2のヌエバ・エスペランサ小中学校(Colegio Mixto "Nueva Esperanza")がこの型の教育であり、ともに移住者子弟は午前中に西語課程を、午後に日語課程を同じ校舎の中で学習する。

オキナワ第1移住地の場合、かつては(1)の型であったが、公立校のストライキなどで学力が著しく低下したため、日本人会が移住者子弟を対象とした私立校を1987年3月に開校した。日語課程(14:20-16:00)での年間日本語授業時間数は小学校356時間、中学校374時間で、音楽、体育、図工、算数をも教え、授業は充実している。西語課程(9:30-12:00)も公立校から優秀な教師を招いているので教師の質は比較的高い。65人の生徒に対して、教師は西語課程12名、日語課程9名となっており、西・日両課程に力を入れていることをあらわしている。教室での授業の他に昼礼と清掃があり、制服や校則も存在し、日本的な規律が重視されている。

一方、オキナワ第2移住地の場合、かつては西語課程のみで、その中に外国語として週4時間の日本語をおいていたが、それは西語授業時間数を圧迫するものととられていた。そのため、西・日語2つの課程にわけた結果、午前中は非日系人生徒と一緒に西語授業、午後は主として日系人だけの日語授業に、ともに集中することができ、両語の学力は向上し、また、生徒の規律や責任感が高まる結果を生んだという。小学校で移住者子弟32人、非日系人70人、中学校で移住者子弟24人、非日系人17人と非日系人との接触を保ちつつ、かつ日語課程は主として日系人の思いきった教育ができる試みである。

同一校を西・日2課程にわけて午前と午後それぞれに集中する方式は、西・日バイリンガル校の先達というべきアルゼンティン・ブエノスアイレスの日亜学院がとっている方式でもある。同校は戦前すでにバイリンガル教育の歴史を有し、1984年3月より公認小学校としてバイリンガル教育の実績を上げてきた。

一方、パラグアイ・アスンシオン市で幼稚園から高校までの日系人教育に実績を上げてきた三育学園の場合は、同一校舎の中に西語校と日語校が存在するが、それぞれは直接結びついておらず、どちらかといえば(1)の型に属する。

西・日2課程にわける方式は、両課程でそれぞれの言語に集中するため、両語での学力が高まる効果を持つことが多い。これは何にも換えがたい利点であるが、他方では2課程をそなえたバイリンガル校では時間的に窮屈である、ホームルームや進路指導を行う時間がほとんどなくなるとの問題は、どの学校でも指摘されている。



(3) (2) の方式に加えて、小学校低学年では同一授業時間内で西・日両語を使用して学習する型

ボリヴィア・サンファン移住地のサンファン学園がこの方式をとっている。サンファン学園設立に至るまでの間、サンファン移住地では子弟の教育をめぐる多くの紆余曲折、試行錯誤を経た。その曲折の詳しい記述については、国本伊代著『ボリヴィアの「日本人村」ーサンタクルス州サンファン移住地の研究』の第6章を参照されたい(注11)。それはおおむね次のような段階を経てきている。

- 1) 入植後、1965年までの各地区分散の小学校と日本人による私設中学校の時期。
- 2) 1965～72年、イエズス会に委託しスクレ市のサグラード・コラソン校の分校となった時期。  
日本語は外国語として教えられ、また数学を日本人教師が教えたが、スペイン語による授業が理解できぬことや教師の質の低さで不満を高めた。この間、1967～69年、メソジスト系の光望学園が日本語による主要科目の授業と補助的な西語授業を行ったが、牧師帰国で閉鎖された。
- 3) 1972～82年、イエズス会系のフェ・イ・アレグリア校への委託時期。政府補助を受ける公立校でもあるためボリヴィア人子弟をすべて受け入れて、その増加が学力低下、負担経費増大を生むとして移住者の不満は再び高まった。この間、1978年より日ボ協会(日本人会)運営の日語校が発足し、8年制による体系的な日本語授業と日本語による他科目の教育が行われた。
- 4) 1983～86年サレジオ会のドンボスコ校期。日本人父母は自らで教師選択や教育方針により多くの発言できる私立校を設立し、午前中に西語授業、午後は同じ場所で日ボ協会運営日本語授業が西語校授業にはほぼ匹敵する時間数とカリキュラムで行われた。しかし、学校運営を任せられた神父と移住者の間の思想的な対立と、期待された学力向上が実現しなかったこと、子弟が高校進学から拒否されたことから移住者は不満を高めた。

このような曲折を経たあと、移住者は、教育を教会に委託するのではなく、日ボ協会自らが学校運営を行うことを決め、ボリヴィア文部省との折衝により、2言語教育を行い、従来の主要科目とともに職業・技能教育をも重視する私立学校サンファン学園(Colegio Experimental Técnico Humanístico San Juan de Yapacan(一小学校5年間、中学校3年間)の認可をとりつけ、1987年2月に開校した。

年間授業時間数は、小学校で西語科目が職業・技能科目を含めて最大約830時間、日語科目が320時間、中学校で西語科目が最大約910時間、日語科目が240時間となり、1986年までと比べて、西語授業が増え、日語授業は減少した。西語課程教師16名はラパス市、スクレ市を中心として選ば

---

(注11) 国本伊代『ボリビアの「日本人村」ーサンタクルス州サンファン移住地の研究』(中央大学出版部 1989年)

れ、その質は高い。校長が主宰する朝礼をはじめとして、けじめが強調されており、規律も高いように見うけられた。

(2) でみたバイリンガル校では西語課程と日語課程とが完全に分かれていてそれぞれが独自の教育を行っている色彩が強いが、サンファン学園では両課程の分離度は小さく、2人の教師はその両課程で教えている。幼稚園が主として日本語であるため、小学校の1年と2年での同一教室での日本語とスペイン語の学習を、日・西両語が完全に話せるバイリンガル教師が教え、日語から西語への移行を滑らかにしている。開校3年にして、西語学力は全般に高まってきている模様で、特に低学年において顕著である。学園開校前の移住地子弟の学力は著しく低下していたため、その影響はサンファン学園になっても中学生には残っており、彼らの西語学力は未だ不十分だが向上が見られる。

このように試行錯誤を重ねた上で、サンファン移住地はようやく、望ましい学校教育の方式を手に入れたが、この方式にも〔1-2〕でみたように、経営面ですでに深刻な経費負担の問題がもちあがっている。

以上の3つの型は、それぞれの移住地の社会環境と要請、また従来の経緯への対応として選ばれてきた。学校の中には発足後3年に過ぎないものがあり、それぞれがどのような成果をあげるかを見るには、今しばらく時間が必要である。

#### 2-3-2 外国系有名校の2言語教育

パラグアイにもボリヴィアにも、ドイツ、フランス、イギリス、イタリア、アメリカなどの外国から援助を受け、幼稚園から高校までの一貫教育を行い、高い学力水準を保っている外国系有名校がある。一貫教育が主なため、日本人移住地からの中途入学はほとんどないが、都市に住む日系人の子弟で学力の高いものの中に、こうした外国系有名校に入学し、好成績で卒業するものはいる。

私たちは、これらの学校で運営主体が維持しようとする言語（例えばドイツ語）による教育と西語教育がどのような関係にあるかを調べるため、これら外国系有名校を訪ねた。有名校の他に、歴史が浅い新しい外国系学校も訪ねた。私たちの目的には、移住地子弟がこれらの学校に進学し得る可能性を探ること、さらに、移住地や日系社会でもち上がっている日系国際学校（コレヒオ・ハポネス）設立構想にこれらの学校の実態や経験から学ぶべきことがあるのではないかと考えも含まれていた。

私たちの時間が限られ、また、復活祭休暇にかかったこともあって、詳しい調査はできなかったが、それでもこれらの学校の多くに関して、それが行っている教育内容の充実、また、一般校とは比較にならない設備のよさの一端を見ることはできた。他方では外国系学校の中に、設備が不十分で、組織もしっかりしておらず、教育内容もどうかと思われるところがあることもわかった。

外国系有名校の生徒の大多数は、スペイン語を母語とするボリヴィア人ないしパラグアイ人で

ある。例えば、サンタクルス市のコレヒオ・アレマンでは、90%がスペイン語を母語とするポリヴィア人であり、ドイツ語を母語にしているドイツ人及びドイツ系ポリヴィア人は5%程度である。アスンシオン市のアメリカン・スクールでも、生徒の80%がスペイン語を母語とするパラグアイ人であり、アメリカ人は10%程度である。アスンシオン市のダンテ・アリギエリ校で生徒の28%がイタリア系というのが、私たちが訪れた外国系校の中で最も高い外国系人比率であるが、これとてもイタリア語を母語にしている生徒の比率はこれより相当低いはずである。

また、外国系有名校のほとんどは、そこを卒業すればポリヴィアないしパラグアイの高校卒の資格を認められ、また、現実に卒業生の過半数はラテンアメリカ・スペイン語圏の大学に進学している。

こうした状況の下では、ラパス市のアメリカン・スクールのように英語が主たる授業言語になっているところを除いては、スペイン語が第1授業言語であり、外国語能力は一定期間に一定水準に達することを求められるが、外国語による長時間の学習を全生徒に課すところは少ない。その代り、希望者には、徹底した外国語教育をほどこし、それら外国語の国の大学入学に必要な水準にまで外国語能力を高めている。

前節で日本人移住地に関してみたような、言語によって2つの課程にわけて教育を行っているのは、私たちが訪ねた中ではアスンシオン市のアメリカン・スクールだけである。ただし、日本人移住地のバイリンガル校では日系生徒の全員が日・西語の両課程の授業をとるのに対して、このアメリカン・スクールでは生徒が言語、文学、歴史、地理、社会の科目では通常西・英語のどちらかの課程にわかれて学習し(両課程の科目を修めることもできるが)、数学、理科、美術、音楽、体育は両課程の生徒と一緒に学習するという仕組みになっている。また、生徒の80%がスペイン語を母語とするパラグアイ人であるため、彼らへの英語教育は重視されるが、英語国民にとって必須の教養である英文学古典などは、西語課程の生徒にとって必須ではない。一方、西語を母語としない生徒にとっては外国語としての西語学習が義務づけられるが、英・西バイリンガルの水準を期待されることはい。西語課程(正式にはパラグアイ課程と呼ばれる)はパラグアイ文部省が認めるカリキュラムに従っており(内容的にも、スペイン語、パラグアイおよびラテンアメリカの文学、歴史、地理に相当な力点をおいている)、この課程を終えると、パラグアイはもちろんラテンアメリカの多くの国の大学に応募できる。一方、英語課程(アメリカ課程と呼ばれる)はアメリカの南部学校連合の認めるカリキュラムで、それを終えればアメリカの大学に応募できる。生徒たちは、このいずれかの課程を終えて、その43%はパラグアイの大学に、57%はラテンアメリカ諸国とアメリカの大学に進学している。

他の外国系有名校の場合、希望者には高い水準の外国語教育を授けている。私たちが訪ねたサンタクルス市のコレヒオ・アレマンは、小・中・高のいずれでも希望者に小人数クラス(1クラス4~5人)で徹底したドイツ語教育を行っていた。この課程を終えたものは、ドイツの大学入学に必要なドイツ語力を持つものとドイツ政府から認められている。

外国系有名校は、その設備、環境、カリキュラム内容、教師の質など一般校よりはるかに高い水準にあり、学力水準も高く、優秀な生徒を集め、卒業生から各界の有力者を輩出させるなど、そこでの学友関係が社会に出てからの人脈として大きく活かしている。その意味では移住者子弟の中にも、こうした学校に入るものがいてもいいのだが、一貫教育の中途入学がむずかしいことと、西語能力が不十分なことが手伝って、今までのところ入学者は極めて少ない。

### 2-3-3 日系国際校（コレヒオ・ハポネス）の構想と外国系有名校

ボリヴィアとパラグアイの双方の日系社会の間で、高校までの一貫教育を行う日系国際校（コレヒオ・ハポネス）設立の構想ないし希望が出はじめている。

今日、ボリヴィアでは移住地に高校がない、ないしはあっても内容の貧弱な公立校で移住者の要望にとってもそうものでない。そのため、高校課程とさらには移住地周辺の教育、技術発展を目指す2年半課程の技術短大を含めた日系国際校が必要であるとの意見が日本人会の指導者の中から出てきており、ボリヴィア文部省関係者の中にもそれを支持する意見もある。一方、パラグアイではアスンシオンまたは移住地の近くに質の高い日系国際校を設立したいとの希望が日本人指導者の中から出ている。

日系国際校に関してはメキシコでの日墨学院が日墨交流の一つの華々しいケースとして知られており、また、今回私たちが訪ねたアルゼンティン・ブエノスアイレスの日亜学院は日系子弟を主たる対象として地道な行き方で2言語教育を行い、日本的な文化、考え方、躰の伝承の努力を行っている。こうした先例に刺激され、また、日本との協力関係が極めて大きいパラグアイとボリヴィア両国で、外国系有名校に伍して日系国際校（コレヒオ・ハポネス）があって当然との気持が日系指導者の間に生れている。そして、日本が両国に大きな経済・技術協力を行ってきただけに、なぜ教育面で日本の力でそうした国際校をつくれぬのかという心情も日系指導者にはある。

それらの心情は理解できるが、構想実現のためには周到な計画と準備をほどこし、しっかりとした経営基盤と運営主体を確立する必要があり、そうしたことへの見通しが未だ明確ではないのが現況である。その構想自体、生徒を日系人を主とするのか、それとも既存の外国系有名校のように、枠をひろげて非日系子弟を多く入れるのか、という点だけでも、現状でははっきりしていない。日系国際校をつくるからには、既存の外国系有名校に設備、カリキュラム、教師の質で劣ることのない学校でなくてはならず、そのためには周到な計画と準備が必要である。さもなければ、私たちがアスンシオンで訪れた台湾系の学校コレヒオ・チャン・カイ・シェクのように一般校と差のないものにとどまってしまうであろう。また、それだけのことをそろえても、既存の外国系有名校の経験と伝統に支えられた名声に、すぐに迫ることは容易ではないように思われる。

私たちの受けた印象では、日系国際校の設立構想の中には日本政府の大幅な援助が期待されているように見られた。この点に関しては、はじめから日本政府が関わることの是非が論議されねばならないであろう。また、仮に日本政府がハードの側面で全面的に援助をすとしても、学校

運営に関して相当しっかりした運営主体が存在しなければならない。アメリカン・スクールやコレヒオ・シャン・カイ・シェクを除いて（いずれも設立にあたっては政府の全面的な支援政策があった）、ドイツ系、イタリア系、イギリス系、フランス系も、それぞれの移住者社会は長い移住の歴史と宗教（キリスト教）及び信仰に結びついた教育の伝統を基盤にして学校を設立し、運営してきた。しかし、そのような伝統のない日系社会が、日本人会という、理念の面では弱い組織を主体として日系国際校の設立を構想しているのなら、私立学校の設立・運営は決して容易なことではないであろう。日系国際校としてのメキシコの日墨学院については、その華々しい側面のみが強調されているが（注12）、その現状についてはあまり知られていない（もちろん関係者は認識している）。日墨学院では、2つに分かれているメキシコ・コース（メキシコ人・日系人生徒）と日本コース（日本人子弟）がカリキュラムも授業時間帯も全く異にして同じキャンパスで教育されており、休み時間ですら両コースの子供たちが一緒にならないなど、さまざまな問題が実際にはある。もちろん学ぶ点もあるはずだが、モデルとするならそのような実態をきちんと調査研究する必要があるだろう。

パラグアイとボリビアの日系社会が将来的には両国内に日系国際校の設立を目指すとしても、移住地日系社会の当面の課題は、移住地内の学校教育において子弟の学力を高め、外部のレベルの高い高校に出来るだけ多くの子弟を進学させ、そこで学力をつけさせると同時に豊かな人格形成と広い交友関係を築けるような進路指導を子供たちに行うことであろう。

---

（注12） 例えば、前掲の『南米（主としてブラジル）における日語教育事情調査指導報告書』の中で（23～25頁）、著者熊本洋日本語指導教師は「日墨学院に日語教育の理想的姿をみる」と報告している。

### 3. パラグアイ及びボリヴィア日系社会の子弟教育に関する意識と現実

#### 3-1 子弟教育に関する移住地日系社会の意識と態度 ——アンケート調査結果を中心に——

ブラジルをはじめとして日系社会はどこも、子供の教育に関しては熱心であると一般に考えられている。しかし、今回私たちが訪問したパラグアイとボリヴィアの移住地に関する限り、そうとは必ずしも言えないように思える。確かに、小・中学校における基礎教育に対する親たちの関心は高いが、高等教育への進学に関してはその必要性をあまり認めていないように思えた。

私たちは、パラグアイとボリヴィアの移住地日系社会がどの程度の関心を子弟の中・高等教育に持っているかを知るために、アンケート調査表に「高等教育への関心度」を探る設問を入れた。

表-9は、今回実施したそのアンケート調査結果を整理したものである。

表-9 子供に期待する教育水準

(%)

地 域	義務教育	高校まで	大学まで	本人しだい
イグアス移住地	2.3	19.7	25.5	52.3
ピラポ移住地	3.2	39.1	19.0	38.0
フラム移住地	4.4	35.8	14.1	43.2
チャベス移住地	3.2	29.0	16.1	48.3
エステ市	7.6	23.0	23.0	46.1
エンカルナシオン市	0.0	6.3	47.6	41.2
サンファン移住地	2.8	39.5	17.2	33.8
オキナワ移住地	4.0	28.0	44.0	15.3
サンタクルス市	0.0	10.0	78.0	10.0
ラパス市	0.0	5.8	82.3	11.3
平 均	3.1	29.4	29.5	34.4

「出所」アンケート調査表「移住地内日系人の教育に関する基礎資料」設問6。

子供に期待する教育水準に関して、都市部と農村部とでは差があることは予測出来たことであるが、ボリヴィアのラパス市とサンタクルス市の数字がずばぬけて高い。もっともこれらの2つの地区は、すでに述べたように、アンケート調査表が日本語学校へ子供を通わせている家庭にだけ配られているから、都市部日系社会全体がこの数字のような高学歴志向であることを必ずしも意味しているわけではない。しかし、今回調査を行わなかったアスンシオン市の日系社会も含めて、全般的には都市部の日系人家庭の方が農村部の日系人家庭よりも高学歴志向であることは間違いないことである。私たちはボリヴィアのラパス市でサンファン移住地出身の40代前半の一世3人に集ってもらい、教育に関する懇談の機会を持った。彼らは〔2-1-3〕で述べられている「教育の谷間の世代」に属するが、いずれも堅実な社会人としてラパス市で生活している。彼らとの懇談で私たちが一番強い印象を受けたのは、「ボリヴィア社会が学歴社会であり、大学を出ていることがどのように大切であるか」を強調したことであった。大学を出ても職がないという現実があることも確かであるが、また大学できちんと学び優秀な人材であれば道が開け

るといのも事実であるという。

移住地の親たちの子供の教育に対する意識については、表-9からわかるように、子供に高等教育を積極的に望む親はオキナワ移住地の44%とイグアス移住地の25.5%を除いて、その他の移住地では20%以下となっている。オキナワ移住地の回答は、既に指摘したようにそのまま採用できない理由があるのでこれを別として、移住地日系社会は子弟の高等教育に関してはそれほど高い関心を持っていないといえよう。

ところで、「本人次第」という回答は、私たちが持った懇談や回収されたアンケート調査表に書き込まれたメモなどから総合的に判断して、「せめて高校ぐらいは卒業してほしい」という気持が込められていると判断できる。言い換えれば、移住地の親たちの圧倒的多数は(70%台)、子供の教育は高校で十分だし、また出来が悪くてもせめて高校ぐらいは行ってほしいと考えていると言える。「高校で十分」とする農村日系社会の意識は、サンファン日ボ協会がまとめた「日本語教育実態調査団への提出資料」の中でも明確に示されている。ここで述べられていることは、「サンファン学園への充実した高校課程の増設(併設)は早急かつ最大の課題である」とした上で、その理由として高校進学に要する費用および最大の高校進学先であるサンタクルス市の教育環境の悪さが挙げられ、「ドクトル」や「インヘニエロ」よりもより多くの中堅技術者養成の必要性であった(注13)。

「高校だけでよし」とする背景には、さまざまな理由があげられる。大学を出ても適切な職がないこと、職を得たとしても給料が安いこと、大学へ進学させるだけの経済力のない家庭が少ないことなどがまず挙げられよう。しかし、もっと本質的には、移住地日系社会が高等教育による日系人子弟の人材育成に関心と夢を持っていないことではないかと思われる。それは、移住地日系農家が日本政府の支援政策のもとに中規模営農へと規模を拡大させ機械化を進めてきた結果、周辺の現地農村部と比較しても、都市部の生活者と比較しても、かなり豊かな生活をする事が出来るようになったことからきていると思われる。ボリヴィア国内最大の養鶏団地として知られる「サンファン移住地」での筆者(国本)の調査を通じて体験したのは、「大学などへ行くよりは家で卵でも拾っていた方がよい」という表現で代表される、極めて実利主義的な生活思想が移住地に根強くあることであった(注14)。

移住地の親たちは、一般的に子供に甘く、寛大で、良い意味では子供たちの自主性を尊重しているようだ。しかし、積極的に子供の将来の進路選択に関わりを持たないようである。その結果、大多数の子供達は将来何になっていいかわからないという状態に置かれている。身近に、将来像を描く助けになるモデルに恵まれない農村部では子供たちが将来何になっていいのかわからないというのも自然であり、能力のある子供ですら高校を極めて安易に中退するなど、現地社会の

---

(注13) サンファン移住地日ボ協会「日本語教育実態調査団への提出資料」

(注14) 国本前掲書、271頁。

農民層と同じような生き方を選択している場合も少なくない。

ブラジル日系社会が子弟教育に対して高い関心を持っていることは、サンパウロ大学を中心とする高等教育機関への高い進学率などを例にとってしばしば語られている。もっとも、ブラジル奥地に建設された集団開拓移住地の子弟教育に関する資料が不足しているので、これをもってブラジル日系社会全体の教育への関心度を語ることはできない。しかし、医者や弁護士や政治家をはじめとして大学教授にまで人材を多数送り出しているブラジル日系社会が子弟教育に高い関心を持ち続けてきたことに関しては、それを否定する人はいないであろう。遅れて参入した少数民族集団が既成の社会で頭角を顕すためには、優れた人材を育成し出来るだけ多くの人材を社会の上層部に送り出すことが重要である。そのためには、出来るだけ多くの子弟に高等教育を受けさせることが第一歩である。その成果が出るまでには何十年という歳月を必要とし、一世は報われない課題を負い、二世の教育にすべてを賭ける程の決意をしなければならない。しかも、二世自身の個人的努力と親の犠牲的な献身によって高等教育をおえた二世を待つ社会が常に報いてくれるとは限らない。それでも、医者や技師や弁護士などの専門職により多くの二世たちが進出することによって、日系社会は全体的な社会上昇を達成することができる。この二世の築きあげた基盤から、三世は人脈を広げていけるであろう。

パラグアイおよびボリビアに移住した戦後移住者のほとんどは奥地開拓移住地に入植し、農業に従事して、共に受け入れ国からその貢献を高く評価されているが、その子弟がより良い生活基盤を築き上げながら社会上昇を果たすためには、一世が築き上げた農業を受け継ぐだけでは不十分である。仮りに長男が親の農業を受け継いだとしても、その他の子供たちは移住地の外の世界のさまざまな分野で活躍し、移住地の農業に従事する日系社会の良き理解者であることによって、間接的ではあるが移住地社会の地位向上に寄与するであろう。また、高学歴子弟の一部が移住地に戻ってきて、農協、日本人会、教育、医療などの現場で働くことも考えられる。このように考えると、短期的な視野で「大学を出ても報われない」として高校レベルで子弟の教育を十分とする考えは、長期的には日系社会の停滞を意味するのではないだろうか。

### 3-2 日系子弟の高校進学と問題点

パラグアイにおいてもボリビアにおいても、移住地日系社会の親たちの意識では、先に紹介したように、子供たちが高校へ進学することはあたりまえであり、義務教育で十分であるとする親は例外的な存在である。地域によって多少の差はあれ、移住地子弟の高校進学率は80~90%台である。しかし、その日本国内と変わらない高い高校進学率の内容についてはかなり問題のあることが、今回JICAが私たちを派遣した理由の一つとなっていることから明らかであるように、すでに深刻な問題となっている。私たちは、パラグアイにおける高校進学と進学後の問題を調査する時間がなかった。しかし、JICAが問題として深刻に受けとめているボリビアの移住地における子弟の高校進学と進学後の問題については、不十分ではあるが調査を行うとともに、移



住地子弟の多くがこれまで進学してきたモンテローロ市近郊のムユリーナ男子校とマリア・アウシリアドーラ女子校を訪問したほか、ラパス市では比較的レベルが高く、これまでに移住地子弟の何人かが進学したことがあり、現在も1名在籍しているドン・ボスコ校を訪問した。

まず、現在サンファン移住地とオキナワ移住地の子弟が最も多く高校へ進学しているサンタクルス市内における移住者子弟の高校進学状況からみてみよう。1990年3月末の3日にわたって調査した結果によると(注15)、両移住地から市内15校に合計42名の高校生が在籍していた。これらの高校のレベルを、現地社会の一般的な評価と校長先生自身が示した評価およびサンファン移住地の高校生会が出している『礎』という作文集に載せられた高校生自身の体験を読んだ感想とを総合して判断すると、表-10にまとめたようになる。Aレベルに入った5校は、市内の高校の中ではコレヒオ・アレマンのようなエリート校ではないが、学力水準も決して低くなく、厳しい勉強を要求する学校である。Bレベルの5校は、普通の一般高校として考えてよい。Cレベルの学校は、面接した校長先生自らが認めたことでもあるが、「成績表をお金で買える学校」であり、真面目な高校生活を送れるとはとても考えられないレベルの学校である。サンファン移住地およびオキナワ移住地の子弟でサンタクルス市内の高校に遊学している42名の中で、表-10で示されているようにCレベルの高校に計23名(55%)が在籍していることは、事態がどれほど深刻であるかを物語っている。

表-10 ポリヴィア移住地子弟の通うサンタクルス市内高校のランクと通学生数  
1990年3月現在

高 校	ランク	サンファン移住地 出身高校生	オキナワ移住地 出身高校生
1	A	2	0
2	A	3	0
3	A	1	0
4	A	1	0
5	A	0	6
6	B	1	0
7	B	1	0
8	B	1	0
9	B	1	0
10	B	1	0
11	C	1	2
12	C	1	3
13	C	1	2
14	C	0	1
15	C	0	3
合 計		15人	27人

(注15) 調査は、サンタクルス市内の大学に通っているサンファン移住地出身の大学生1名に依頼し、私たちの調査項目に従って行われた。

移住地から高校へ進学しても、多くの子供たちが落第し、そして中退していく。その過程をみると、移住地子弟はまず高校に入学しても最初の1年はスペイン語で相当苦勞する。筆者（国本）の調査では、1年から2年に進学する時に落伍する子供たちが多い。そして落第者の多くは、はじめに入学した高校よりレベルの低い学校へ転校するか、中退してしまう。最近では中退して日本へ出てきている場合も複数あり、親の意見によれば「出稼者ではなく自費研修生」として日本に来ている。

日本の場合と異なって転校が容易であるボリヴィアの高校の場合、すべてが落第してレベルの低い学校へ転校するわけではないが、移住地子弟の転校の場合、大多数はそうだと考えてもいいようだ。また落第せずとも、モンテロ市近郊の比較的教育体制の整ったムユリーナ農業高校やマリア・アウシリアドーラ女子校などからも、寮生活が厳しいからという理由などでサンタクルス市内の学校へ転校する場合がある。この場合、だいたいレベルを落して転校しており、未成熟な高校生にとって極めて問題のある生活を始めるようである（注16）。

サンタクルス市内の高校に進学する場合、全寮制でない場合が多く、親類の家に下宿して世話になるか、全くの他人の家に下宿するか、日系学生寮に入り、午前の部（8:00-13:00）の授業を受けるか、午後の部（16:00-21:00）の授業を受けるかという、日本でいう全日制高校とはかけ離れた高校教育を受けている。これらの一般高校では課外活動も生活指導も一切ないため、多くの高校生は1日の大半の過ごし方に問題を有している。1986年8月にサンタクルス市内の高校に通うサンファン移住地とオキナワ移住地出身の高校生グループがボリヴィア人を襲って殺害しその乗用車を数日間乗り廻していたという事件が起こったが、これは極端な事件であったにせよ、このような事件が発生してもおかしくないほど、親元を離れて高校に通う移住地出身の高校生をとりまくサンタクルス市内の社会環境は貧しく、そして悪い。サンファン移住地日ボ協会が私たちの調査団用にまとめてくれた資料の中でも、「多くの子弟が高校進学地として選ぶサンタクルス市の教育環境は、一部を除いて悪く、語学能力をはじめとする環境適応能力に問題を有する子弟の就学地として問題が多い」と指摘されている（注17）。

移住地子弟の高校進学とその後の高校生活に関する問題の一つは、ボリヴィアの移住地に限ると、移住地子弟の多くは移住地の外の世界への適応性が低く、容易に挫折してしまうことにあるようだ。しかも、移住地の親たちの多くは、子供たちをとりまく社会環境についても、また子供が通っている学校の状況についてもほとんど何も知らないのが実状である。先に紹介した1986年の「高校生殺人事件」が発覚した時、筆者（国本）は現地調査でサンファン移住地に滞在していた。移住地ではいくつもの会合が開かれ、日ボ協会や青年団を中心にして高校生の抱える問題や親子関係などについて話し合いが行われたが、ここで明らかにされたのは、移住地の外に子供

---

（注16） 国本前掲書、266～268頁。

（注17） 前掲サンファン移住地日ボ協会資料。

を送り出している親たちが子供たちの学校についてほとんど何も知らなかったことである。子供が通っている高校で落第し、退学して別のレベルの低い高校へ転校しても、その実態をほとんどの親たちは知らなかった。

年齢的にみても問題の多い高校生を、貧しい社会・教育環境の中に送り出すことの危険性と、同時に親たちが担う経済的な負担を考えて、サンファン移住地では現在サンファン学園に高校を併設することを強く要望している。これについては、単なる併設という問題だけでなく、現在2つに分かれている日系私立学校とボリヴィア人子弟の通う公立校の統合問題があり、実態はもっと複雑である。ただし、サンファン移住地内にはすでに公立校の方に高校が併設されており、表-11にみるように日系子弟の少なからぬものが在籍している。

表-11 サンファン移住地子弟地区別高校進学者数 (人)

地 区	1987年	1989年	
	合計	男	女
サンタクルス市	31	7	12
モンテローロ市	13	7	8
コチャバンバ市	12	2	7
ラパス市	7	3	3
スクレ市	2	0	0
サンファン移住地内	0	7	3
合 計	65	26	33

「出所」 1987年については国本前掲書、266頁。大学生を含む。  
1989年については、「高校生会名簿1989年」より。

しかし、移住地内高校進学も、日系社会にとっては別の問題がある。次の項でみるように、移住地子弟の大学進学率は極めて低い。したがって、大多数の子弟は高校レベルの教育をおえるだけとなる。この状況を考えると、せめて高校生時代だけは、移住地の外で新しい世界を体験し、ボリヴィア人の友人をつくり、ボリヴィア社会の価値観に触れる機会になるべきではないかとも考えられよう。その意味では、たとえ移住地内に高校があっても、出来るだけ移住地外の高校へ子弟を送り出し、その就学期間中親は全力を持って子供を見守ってやるほどの決意をする必要があるのではないかという思いがする。この思いは、私たちがサンタクルス市内にある学生寮を訪問した時、特に強く感じた。

日系学生寮については、私たちはパラグアイのエンカルナシオン市とアルゼンティンのラプラタの日系学生寮も訪問したが、サンタクルス学生寮は建物の状態も一番貧しく、寮生の管理にも問題があるように思われた。大多数の寮生が高校生であるからには、自主管理能力がある大学生が中心の寮とは異なった寮の管理があつてしかるべきであろうし、それに対して親たちも最大限の努力と協力をすべきであろう。この点でも、サンタクルス学生寮へのサンファンおよびオキナワ両移住地の親たちの姿勢には問題があるようだ。

サンタクルス学生寮と対照的であったのがラプラタ日系学生寮であった。私たちと数時間にわたって懇談してくれた24名の大学生たちの頼もしい生活ぶりともみごとな程整然と行われている寮の自主管理に、私たちは強い感動を覚えた。ラプラタ日系学生寮は大学生を対象としているし、また学生たちはアルゼンティンばかりでなくパラグアイやボリヴィアからの留学生も含まれており真剣に勉学を志す若者たちが集っているからでもあろう。それにしても、この2つの学生寮の間にあった、建物と設備、管理体制、雰囲気、寮生の姿勢にすら大きな差が感じられたことに、私たちは強い印象を受けた。

### 3-3 日系子弟の高等教育機関進学と問題点

表-12は、今回私たちが実施したアンケート調査で得られた日系子弟の高等教育機関への進学状況を示したものであるが、すでに述べたように同表の示す数字が正確でないことは明らかである。イグアス移住地に関しては、移住地の日系戸数全体を対象として調査表が配布されなかったため、当然ながらこの数字で示された以上の子弟たちが高等教育機関に進学したはずである。オキナワ移住地の回答は、すでに指摘したように問題点が明らかであったのでここでは数字を挙げなかった。また、ほかの移住地においても全移住者戸数に対する回答率は必ずしも高くなかったため、この種の資料としては極めて不十分である。サンタクルス市とラパス市の日系社会はかなりの人口になるはずであるが、調査表は日本語学校に子供と通わせている家庭にのみ配布されたため、この場合も参考にならないので排除した。敢えてこの資料を提示したのは、正確な数字ではなくてもおおよその傾向をつかむには参考になるのではないかという判断からである。

表-12 日系子弟の高等教育機関進学状況（1990年3～4月）

(人)

地 域	調査戸数	卒業生数		中退者数		在 student 数		調査戸数に対する在 student の割合
		男	女	男	女	男	女	
イグアス移住地	86	1	2	0	0	2	0	2.3%
ピラポ移住地	184	2	1	4	0	1	3	2.2%
フラム移住地	134	3	1	1	1	4	0	3.0%
チャベス移住地	31	1	2	1	1	1	4	16.1%
エステ市	26	1	0	3	1	0	0	0
エンカルナシオン市	63	8	5	7	1	5	8	20.6%
サンファン移住地	139	5	5	5	4	12	1	9.4%
合 計	663	21	16	21	8	25	16	6.2%

〔出所〕 アンケート調査表「移住地内日系人の教育に関する基礎資料」設問7～9。

正確な数字ではないということを前提としてではあるが、在 student だけを取り上げてみると、おおよそ次のことが言えよう。まず第1に、パラグアイとボリヴィアの日系子弟の高等教育機関への進学傾向がかなりはっきりと異なっていることである。パラグアイでは男子より女子の在 student の方が多いのに対して、サンファン移住地では男子学生の方が女子学生と比較しては圧倒的に多

い。第2の特徴は、全体的に中退者の数が多いことである。中退の理由に関しては、病気や経済的理由を上回って「何となく」あるいは「勉強に興味がなくなったから」というものが第1位であった。第3の特徴は、都市部であるエンカルナシオン市の大学進学率がずばぬけて高いことである。エンカルナシオン市の日系社会では、5家族に1人の割合で大学生がいることになる。チャベス移住地では9家族に1人の大学生が、またサンファン移住地では11家族に1人の大学生がいることになるが、イグアス移住地やピラポ移住地などでは子弟の高等教育機関への進学率はかなり低いようだ。

表では示せなかったが、進学する大学の学部は多様であり、特別に集中している学部はなかった。しかし、筆者（国本）が過去に調査したサンファン移住地では、在学生に限らず累積進学者数でみると工学部と医学系学部（医学部、歯学部、看護学部、薬学部）への進学が目立っていた。

外国への留学に関しては、エンカルナシオン市日系社会出身の大学在学学生13名の中4名がアルゼンティンとブラジルに留学していた。

私たちは、以上で示した数字が正確でないとしても、一般的に知られている状況も併せて考えて、パラグアイ及びボリビアの移住地子弟の高等教育機関への進学率は低いと考えている。例えば、移住地建設後の年月を考えると、移住地内にある公立学校に師範学校あるいは大学の教育学部を出た日系人子弟の教師がある程度の人数存在していてもおかしくないと思うが、その数はまだ極めて少ない。パラグアイでもボリビアでも二世の弁護士が誕生しているが、今回の調査の回答からだけみるとそれぞれ1名ずつである。医者や歯科医はすでに両国とも複数の二世の医者や歯科医が社会で活躍しているが、私たちが懇談したパラグアイのラ・コルメナ移住地出身の2世タナカ医師の話によると、難関であるアスンシオン大学医学部に近年入学する日系人の数は、韓国人や中国人と比較しても少ないということであった。

先にも指摘したように、日系社会が現在大学を出てもそれに見合うだけの職がないという理由で大学教育を軽視することは、将来の日系社会の発展を阻害するものである。農業を主体とする日系移住地がさらなる発展をするために、その国の日系社会全体の地位向上が大きな力となるはずであり、能力のある子弟に無理をしても高等教育を受けさせるのは一世にとっては大きな負担ではあるが、大切なことである。また、現在の機械化された中規模農業を効率よく営むためにも、また安定した生活を持続するためにも、さらに日系人および現地人を含めた地域社会の活性化と発展のためにも、高等教育を受けた日系人たちが移住地内の自治体、農協、医療、教育機関などに戻ってくることも必要である。フラム移住地がすでにラパス市となったように、日本人の集団移住地として建設されたものが、やがて当該国の地方行政単位へと発展していくのは自然の流れであろう。このように日本人集団移住地が「現地化」していく時、日系社会が地域社会のリーダーシップを握れる実力と見識を備えた日系人を擁していることは重要である。

しかし、子弟を都市部の高等教育機関に送り出すことは、移住地の親たちにとっては経済的に大きな負担である。私たちはアルゼンティンのラプラタ日系学生寮を訪問し学生たちと数時間懇

談した時、この学生寮の自主管理組織と各寮生たちの自覚と抱負に心打たれたが、同時に彼らが極めて経済的な学生生活をしていることを知った。パラグアイでもボリヴィアでも、大学の数および大学に進学する移住地子弟の数がそれほど多くない現在、拠点都市に日系学生寮を建設し、ラプラタ日系学生寮のような運営を行うことによって、将来日系社会のみならず当該国の中間層の仲間入りをする移住者子弟に対して、日本政府は経済的および環境作りの上で支援する必要があるのではないかという思いを強くした。これは広い意味での人材育成に寄与するものである。せっかく進学する意欲と機会があった若者たちが、先にみたように中退することなく学業を全うするための支援があってしかるべきである。

## 4. 移住地子弟教育政策への提言

### 4-1 移住地社会の変化と人材育成

パラグアイとボリビアに戦後建設された集団移住地では、日本語の維持は比較的よくなされてきた。そこでの日本語学校の教授法は伝統的な国語教育が主であるが、家庭で主として日本語で育ってきた移住者子弟に対しては成果をあげてきた。しかし、移住地のスペイン語学校の質は低く、子弟のスペイン語能力は往々にして不十分であった。移住地西語校の質の向上は（私立校の設立によってそれを果たした移住地ではその質の維持が）、移住地教育にとっての最重要の課題である。そのためには、すぐれた教師を確保する目的でJICAが行っている西語教師への給与補助の持続が強く求められる。

移住地社会で起きている富裕化、テレビ・ビデオの浸透、現地的価値観との接触、スペイン語の浸透などの一連の変化は、教育熱を弱め、また、日本語、日本的考え方の維持を、従来の方式だけでは難しくしていくであろう。一方では、移住地とその周辺のパラグアイ人またはボリビア人の社会では、以前に比して教育への関心は高まりつつある。これらの変化に見合った、また、移住地の未来がどのような人材を必要とするかを見通した対応が求められている。

### 4-2 移住地子弟に対する日本語教育の今後の展望と位置づけ

「移住地子弟になぜ日本語学習が必要なのか」については、多くの人たちが様々な形で論じてきた。日本的文化や考え方を継承するため、親子の対話を保つため、日本とのつながり（それには、よい仕事を得るという考えも含まれる）を保つため等々、いずれの動機も肯定されるべきである。今日では日本語を学んでおくことが有利であるとの意識が子弟の間に浸透していて、日本語学習の意義を敢えて説く必要はなくなった。今日むしろ問題となるのは、「なぜ」ではなく、「どのように」、また「どれだけ」学習するのがよいかということである。

移住地での言語使用の状態が徐々に変化するにしたがって、さらに、日語校生徒に混血、非日系生徒が増えるにつれて、従来の国語教育的方法だけでは不十分になりつつある。外国語及び継承語としての日本語教育をも考慮する必要がある。そのためには、次節で述べる日・西バイリンガル教師の養成と、それへの補助が強く求められる。また、日本語の継承と教育全般について家庭内での親の役割の重要性が、常に想起されるべきであり、それに関する指導がなされるべきである。

移住地子弟のスペイン語学力が低いことの原因を、日本語学習に時間をとられるからだとする考えがあるが、この考えは、少なくとも低学年に関しては当たっていない。むしろ、西語校の質の低さが、他の多くの要素とともに原因をなしている。現行の年間200～350時間の日語学習は、西語学習を圧迫したり、西語能力を低下させるものでなく、むしろ、多くの子弟にとっての第一言

語である日本語の学習を通じて、言語的思考力を育て長期的には西語能力と知的発達を高めるものである。そのため、移住地で日本語教育に十分な時間を費やしても、決して悔いることはないと思われる。

#### 4-3 日本政府（JICA）が担うべき支援と施策

##### 4-3-1 西語教師への給与補助の持続

西語校の質の向上、とりわけ、知識、能力、熱意ですぐれた教師の確保は、移住地の子弟教育にとって最重要課題である。そのため、JICAは西語教師への給与補助を行ってきたが、これが2年後には打ち切られることになっている。しかし、移住地の現況を見る時、西語教師の給与を維持するために授業料をこれ以上あげることは無理があり、JICAによる給与補助を2年後のあとも持続することが移住地教育の質を保つためにぜひ必要である。

##### 4-3-2 日系バイリンガル教師養成のための補助

日本語教育が「国語教育」から「継承語ないし外国語教育」の要素を今後強めていくことが予想され、そこでは日系二世のバイリンガル教師が中心的役割を果たす状況が生ずる。また、各移住地の学校ではじまった2言語併用教育が十分に機能するためにはバイリンガル教師の存在が不可欠である。

しかし、現況では日系バイリンガル教師の数は極めて限られ、このままでは、その数が増える可能性は低い。パラグアイ、ボリビアともに教師の待遇が悪く、移住地子弟の中から教師になろうとする人がほとんどいないためである。教師を志す子弟たちに奨学金や研修機会などのインセンティブを拡大し、若いバイリンガル教師を生み出すことが強く求められる。

##### 4-3-3 移住地子弟向けの教材開発への補助

移住地での日本語教育がこれまで「国語教育」の行き方を取り、教科書も光村図書のものでそのまま使ってきている。この方式が今日までのところ、それなりの成果をあげていることは評価したい。しかし、今日すでに起こりつつある言語使用の変化をみると、移住地の子弟がその生活環境、言語環境からもすぐに理解でき、関心の持てる教科書や教材が必要となりつつある。スペイン語圏の日系人子弟向けの日本語学習教科書の開発は、アルゼンティンの日亜学院で一部なされているが、このようなところと各移住地の日本語教師が連絡をとり合って、移住地子弟にとって最も理解しやすく、関心のもてる教科書をつくることが望まれ、そのための補助をJICAが行うべきであろう。

##### 4-3-4 小規模コミュニティ・センターの設立

非日系人を含めた移住地の地域住民全体の教育文化水準の向上なくしては、移住地の教育環境は最終的にはよくならない。今日の移住地には公民館はあっても、地域住民が技能を身につけ、健康とスポーツに関して知識を得、実践し、文化や娯楽を享受する場はない。地域住民がそうした活動に加わり、ないしは接することがその子弟の教育への関心となってはね返り、長い目で見



て移住地全体の教育水準を高めることになる。そうした場、つまりコミュニティ・センターが各移住地に必要である。

それはアスンシオンのパラグアイ・日本センターのような大規模で豪華である必要はない。将来も維持が可能な規模で、しかし住民が気軽に入れるようなものが望ましい。そうしたセンターの存在は、移住地のいくつかで見られるパトロンと労働者の乖離状態を緩和するのに役立つであろう。また、日系社会が地域の活性化にリーダーシップを発揮する場ともなりえよう。

移住地指導者にもそのことを強く感じている人が多い。サンファン日ボ協会は私たちに提出した資料の中で次のような意見を出している。「一教科（日本語）の極端な強化につながるような施策より、移住地の子弟のみならず、移住地内あるいはその周辺に住むポリヴィア人を丸抱えにした、この地域社会全体の子弟教育のレベルアップに視点を置き換えた援助の在り方を模索したものである。」（注18）

地域社会の教育文化水準向上のための、また、住民間の融合を促進する、しかも管理可能な規模でのコミュニティ・センターの設立が望まれる。それを核として、日本人移住地がその周辺地域の教育文化の中心となり、それから非日系人のすぐれた人材をも生み出すことが必要である。

#### 4-3-5 【日系国際校】設立構想への援助問題

〔2-3-2〕で述べたように、今日、ポリヴィアとパラグアイの双方で、日系社会指導者の間で幼稚園から高校までの質の高い一貫教育を行う日系国際校（コレヒオ・ハポネス）設立の構想ないし希望が出ている。そうした構想は検討に値するが、その実現のためには、周到な準備と計画が必要であり、またそれを実現に向わせる熱意と経験のある主体がなくてはならない。そのためにも時間をかけて準備が進められ、両国に存在する外国系有名校の知識と経験を十分に踏まえた上で構想が練られる必要がある。それは本来的に日系社会自体がなすべき仕事であるが、求められる時にはJICAは必要な助言と助力を与えるべきであろう。日系国際校の可能性を探りつつも、当面の間は、既存の水準の高い高校への移住者子弟の進学率を高めることが、移住地と日系社会の将来を益する道である。

#### 4-3-6 都市部高校・大学へ進学する移住地子弟への奨学金制度の拡充

移住地子弟が移住地外部の高校で勉学することは、単に学力をつけるという問題だけでない重要な意義を含んでいる。そこで育まれる交友関係を通じて日系社会では得られない広い視野と人脈と異文化理解を手にするからである。奨学金が勉学へのインセンティブとなるような制度にするとともに、奨学金を受けたものたちがそれに報いるような制度的機能を整える必要がある（中退したら返還を求める、あるいは成績が悪いと奨学金を中止するなどの措置も含む）。

#### 4-3-7 ポリヴィアにおける日系学生寮の整備と建設

すでに〔3-2〕及び〔3-3〕で述べたように、現在あるサンタクルス学生寮の整備は緊

---

（注18） 前掲サンファン移住地日ボ協会資料。

急課題である。本来ならば、現在の管理主体であるサンタクルス州日ボ文化協会が自主的に問題の所在を検討し改善すべきである。しかし、緊急課題であることを認識して、JICAはサンファンおよびオキナワ両移住地の指導者たちの注意を喚起し、早急に改善に手をつけるべきである。そうでなければ、現在サンタクルス市内の高校および大学で学んでいる若い日系人がおくる青春があまりにも貧しすぎるし、将来の日系人材育成という日系社会及び日本にとっても重要な課題に決して小さからざる問題を残し、それを引きずり続けることになる。さらに、ラパス市かコチャバンバ市に日系学生寮があってよい。

#### 4-3-8 現行の移住者子弟上級研修員制度の改善と拡充

現在JICAには移住者子弟を対象にした研修制度が複数あるが、現行の上級研修員制度を重点的に拡充し、かつ現在ある制度的欠陥を是正して、研修員で来日し日本の大学で勉学する彼らが学位（主として修士）を目指せるようにすべきである。その理由は、中級研修員と異なり、上級研修員の場合すでに現地の大学を修了しており、日本の大学卒とは異なって彼らは現地社会のエリート層の仲間入をしている。したがって、彼らのほとんどは自国の発展に役立ちたいという明確な意志と希望を持っている。このような状況を考慮すると、また日本の国際協力という観点から見ても、日系社会の将来にとっても、彼らが貴重な人材であることは明らかである。しかし、従来上級研修員は制度的には2年間の日本留学期間を与えられながら、修士号を取得することが制度的にほとんど不可能であった。現地社会が日本の社会以上に学歴社会であることを考えると、彼らが日本留学で修士号を取得して帰国することは大きな意味がある。例えば、弁護士の資格をもつ研修員が日本で修士号を取得すれば、母国に戻って弁護士として仕事を続ける一方で大学に迎えられ（日本でいう非常勤講師）、講座を持つことができる。しかも、すでに日本語がかなりのレベルにある日系子弟の上級研修員が2年で修士号を取得することは決して難しいことではない。現在あるこの上級研修員制度が抱える諸問題を早急に取り除き、学位取得に結びつくような制度に改善する必要が急務である。それには、上級研修員を受け入れる日本側の大学とも密接な連絡を取り、学歴の異なる日本の大学に入学した時点でスムーズに正規の修士課程に在籍できるようにする配慮も必要である。また、現地における募集時期の配慮などささやかな変更によって改善できる点も少なくないと思われるので、早急に上級研修員制度の改善に着手すべきである。



附 属 资 料





家庭内教育に関するアンケート③配布先

国	地 域	配布部数	回収部数	備 考
パラグアイ	ピラポ移住地	2 1 1 戸	1 8 4 戸	
	チャベス〃	3 2	3 1	
	フラム 〃	1 4 2	1 3 4	
	イグアス〃	1 1 0	8 6	
	エステ市内	3 3	2 6	
	エンカルナシオン市内	7 6	6 5	
ボリヴィア	オキナワ移住地	1 7 6 戸	1 5 0 戸	
	サンファン〃	2 0 2	1 4 0	
	サンタクルス市内	5 6	5 0	
	ラパス市内	2 0	1 7	

家庭訪問・懇談実施

## 日本語学校運営に関する基礎資料

国際協力事業団教育実態調査団

1990年3月

学校名： \_\_\_\_\_ 国 \_\_\_\_\_ 移住地(市) \_\_\_\_\_ 学校

記入者名： \_\_\_\_\_

記入年月日： 1990年3月 \_\_\_\_\_ 日

## 1. 児童・生徒数について（1990年度学年始めの人数）

	日 系	日系混血	非日系	そ の 他
幼稚園				
小学校1年				
2年				
3年				
4年				
5年				
6年				
中学校1年				
2年				
3年				
4年				
そ の 他				

## 2. 以下の質問については、1989年度（1年間）に関して書き込み下さい。

## A. 年間授業時間数について

	通常授業期間	長期休暇期間	年間授業時間数
幼稚園			
小学校			
中学校			
その他			

(時間数については必ずしも1時間単位でなく、1時限として扱っている単位で計算して下さい。)

貴校の1時限は何分間ですか。 \_\_\_\_\_ 分)



B. 各科目年間授業時間数（1時間は1時限で計算して下さい）

		時間数	主 な 内 容
日本語	小学校		
	中学校		
音楽	小学校		
	中学校		
体育	小学校		
	中学校		
図工	小学校		
	中学校		
社会	小学校		
	中学校		
算数	小学校		
	中学校		
書道	小学校		
	中学校		
その他	小学校		
	中学校		

ご協力ありがとうございました。

INFORMACION BASICA SOBRE COLEGIOS EXTRANJEROS EN EL PARAGUAY

1. Nombre oficial del Colegio \_\_\_\_\_  
 2. Personarfa jurfdica \_\_\_\_\_  
 3. Afo de fundaci3n \_\_\_\_\_  
 4. Direcci3n \_\_\_\_\_

5. Nfmero de alumnos (Inicio de la gesti3n 1990)

	Var3n	Mujer	Total
Prekinder			
Kinder			
Primaria			
B3sico			
Medio			
Total			

6. Origen de los alumnos

- 1) Alumnos paraguayos con ambos padres paraguayos \_\_\_\_\_ %  
 2) Alumnos con ascendencia alem3n \_\_\_\_\_ %  
 3) Alumnos con ascendencia china \_\_\_\_\_ %  
 4) Alumnos con ascendencia inglesa \_\_\_\_\_ %  
 5) Alumnos con ascendencia italiana \_\_\_\_\_ %  
 6) Alumnos con ascendencia norteamericana \_\_\_\_\_ %  
 7) Alumnos con otras ascendencias \_\_\_\_\_ %

7. Existencia del internado                      SI                      NO

8. Sistemas o regfmenes de promoci3n de alumnos aplicados (becas, etc.)

Describir concretamente.

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

9. Pensi6n anual (Gesti6n 1990)

Kinder	_____
Primaria	_____
B6sico	_____
Medio	_____

10. Describir en detalle las caracter6sticas del programa educativo en relaci6n a los colegios fiscales del Paraguay.

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

11. Caracter6sticas de la conformaci6n de cursos.

- |   |    |    |
|---|----|----|
| 1) Conformaci6n de acuerdo a la capacidad (intelectual)   | SI | NO |
| 2) Divisi6n de cursos s6lo en algunas materias especiales | SI | NO |
| 3) ¿Cu6les son esas materias especiales? _____            |    |    |

12. Porcentaje de aplazos (Gesti6n 1989)

Primaria	_____	%
B6sico	_____	%
Medio	_____	%

13. N6mero de alumnos desertores (Gesti6n 1989)

	N6mero	Causas principales
Primaria		
B6sico		
Medio		

14. Porcentaje de bachilleres que ingresan a la universidad (Promoción 1989)

Universidades del Paraguay \_\_\_\_\_ (número)

Universidades del extranjero \_\_\_\_\_

(Por país) \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

15. Edad promedio de los profesores y promedio de años de trabajo en el colegio (a marzo de 1990).

	Edad promedio	Promedio años de trabajo
Kinder		
Primaria		
Básico		
Medio		

16. Salario promedio de los profesores (Anual) \_\_\_\_\_

17. Idioma común u oficial que usan los profesores y autoridades en las reuniones y otras actividades dentro del colegio \_\_\_\_\_

18. ¿Es condición indispensable para el profesor el dominio del idioma español?

SI

NO

19. Información sobre las fuentes financieras para la administración del colegio.

Pensión escolar de los alumnos \_\_\_\_\_ %

Cooperación del gobierno extranjero ( ) \_\_\_\_\_ %

Cooperación de diferentes fundaciones e instituciones \_\_\_\_\_ %

Otras \_\_\_\_\_ %

Muchas gracias

Misión de Estudio sobre la Enseñanza  
del idioma Japonés

14 de marzo de 1990

## 移住地内日系人の教育に関する基礎資料

国際協力事業団教育実態調査団

1990年3月

つぎの質問について、下線の部分に記入し、回答の選択肢があるものについては一つだけ選んで、その記号を○で囲って下さい。

1. 住んでいる移住地名 : \_\_\_\_\_ 移住地
  
2. お子さんがまだ家族と一緒に生活している場合、家庭内で使用する言語は何語ですか。次の中から選んで下さい。
  - a. 日本語だけ。
  - b. 日本語が主であるが、かなりスペイン語が混ざる。
  - c. 日本語とスペイン語が半々。
  - d. スペイン語が主である。
  
3. 家庭内で日本語教育を意識して行なっていますか。次の中から選んで下さい。
  - a. 意識して正しい日本語を使うようにしている程度。
  - b. 意識して正しい日本語を使うようにしている他に、日本語の本を読ませたり、書き取りなどの勉強をさせている。
  - c. 日本語学校にすべてを任せて、家庭の中では特別何もしていない。
  
4. お子さんの日本語教育を、親としてどのように位置付けていますか。次の中から選んで下さい。
  - a. 日系人として当然日本語を覚えるべきである。
  - b. 将来役にたつと思うから。
  - c. 特に必要と思わないが、子供が勉強したいというから。
  - d. 必要ではないので、日本語学校に行かせていない。
  
5. 日本のテレビ番組などのビデオをお子さんに見せていますか。次の中から選んで下さい。
  - a. 家にビデオ・デッキがあるので、かなり頻繁に見せている。
  - b. 家にビデオ・デッキはまだないが、近所の家や親類の家などでよくみせてもらっている。
  - c. ほとんど見せていない（見る機会がない）。

6. お子さんの教育はどこまでを考えていますか。次の中から選んで下さい。
- 義務教育で十分である。
  - 高校まで是非行かせたい。
  - 大学まで是非行かせたい。
  - 本人の希望しだい。義務教育までも大学まで行こうとも構わない。
7. 現在大学あるいは高等教育機関（士官学校、師範学校、高校を卒業してから入学する専門学校など）で学んでいるお子さんがおられる場合、ご記入下さい。複数のお子さんが在籍している場合、裏面を使って結構です。それぞれのお子さんについてお答え下さい。
- 1) お子さんの性別 : a. 男 b. 女
  - 2) 学校名と学部名 : \_\_\_\_\_
  - 3) 所在地 : \_\_\_\_\_
8. 既に大学あるいは高等教育機関を卒業し、仕事につかれていますお子さんがおられる場合、結婚され遠くに住んでいる場合でも、下記の質問にお答え下さい。複数のお子さんがおられる場合、裏面を使って結構です。それぞれのお子さんについてお答え下さい。
- 1) お子さんの性別 : a. 男 b. 女
  - 2) 学校名と学部 : \_\_\_\_\_
  - 3) 卒業年 : \_\_\_\_\_ 年
  - 4) 現在の職業 : \_\_\_\_\_
  - 5) 現在の居住地 : \_\_\_\_\_ 国 \_\_\_\_\_
9. 大学あるいは高等教育機関まで進学させたが、中退してしまった場合。複数のお子さんがおられる場合、裏面を使って結構です。それぞれのお子さんについてお答え下さい。
- 1) お子さんの性別 : a. 男 b. 女
  - 2) 学校名と学部 : \_\_\_\_\_
  - 3) 中退した学年 : \_\_\_\_\_ 年
  - 4) 中退した理由 : 下から一つだけ選んで下さい。
    - a. 経済的な理由
    - b. 勉強に興味が無くなったから
    - c. なんとなく
    - d. その他の理由 \_\_\_\_\_
10. この調査表に記入した方 : a. 家族の父親 b. 母親 c. 家族の一員

## 2. 持ち帰り資料一覧表

### 移住地関係

ブラジル	グアタパラ移住地	グアタパラ農事文化体育協会 1989年度定例総会資料 グアタパラ移住地の概要
パラグアイ	イグアス移住地	イグアス日本人会概況
ボリヴィア	サンファン移住地	移住地概況 1989. 5 サンファン移住地の現状と未来像
	オキナワ移住地	オキナワ移住地概況 1989. 4 オキナワ日ボ協会1989年度決算書 " 1990年度収支予算書

### 日本語教育関係

ブラジル	サンパウロ大学日本文化研究所 サンパウロ日本語普及センター グアタパラ移住地	ブラジルの大学における日本語・日本文学 教職者 第1回シンポジウム資料 1989年度事業報告 1990年度事業計画 日本語教師要請講座 日本語教育の経緯
パラグアイ	アスンシオン日本語学校 ピラポ中央日本語学校 三育学院	学校要覧 文集「みのり」 文集「南十字星」(野崎記念学生寮 創立10周年記念誌)
ボリヴィア	ラパス補習授業校 オキナワ第1日ボ学校 ヌエバエスペランサ小中学校 サンファン学園	学校要覧・ビデオ教材目録 " " " 文集 決算書・1990年度予算案 年間指導計画・行事予定・教材一覧 ESTATUTOS Y REGLAMENTOS DEL COLEGIO TECNICO-HUMANISTICO "SAN JUAN DE YAPACANI" 他
アルゼン ティン	ブエノスアイレス  ラプラタ	アにおける日本語教育の概況 ア事務所管内日本語学校概況一覧 ブエノスアイレス日亜学院史概略 ラプラタ学生寮入寮者名簿他

## 外国系学校

パラグアイ Colegio Dante Alighieri (伊) Reglamento Interno (プリント)  
American School(米) School Profile 1989~1990 (〃)  
Colegio de Goethe (独) 学校案内(小冊子)

ボリヴィア Colegio Alemán de Santa Cruz 学校案内(小冊子)  
学校年誌(1936~1990)

## その他

パラグアイ 「パラグアイ農総試概要」(1990. 2)  
「パラグアイ事務所業務概要」他

ボリヴィア 文部省教育改革案(小冊子)  
"PLAN DE EMERGENCIA HACIA UNA REFORMA EDUCATIVA"  
オキナワ診療所増改築案



JICA